

Decipit exemplar
vitiis imitabile

エンシェント・ワン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつてキーノと呼ばれた少女は――

§000 ブローラーノーンの盟主

イビルアイから過キリノ・ファスリス・インベルン去の自分へ

年月は周りの人間が思っているほど早く過ぎ去り、その時間感覚は当人にしか分からない。

同じ時間を共有する仲間が欲しいと思ったこともあったけれど、今のところ殆どが死んでしまった。——これから死ぬ予定の者、種族や職業クラスなどの特殊技術スキルの恩恵で不死性を得た者もごくわずかだが居るが——

定命にある者の運命であるかのように——

「……………」

漆黒に近い暗い空間を迷うことなく歩く者は——『イビルアイ』と呼ばれる魔法詠唱者マジック・キャスターにしてリ・エステイ・ゼ王国に在籍するアダマントイト級冒険者——女性だけのパーティ『蒼の薔薇』の一人——であった。

水滴が落ちる音を聞きつつ前に進む。

二百年ほど前に立ち去ったかつての隠れ家。

当時はまだ頭の回らない状態だっただけに今現在どうなっているのか確認するのが怖い。——一応、今時分の自分には怖いものが存在する。

恐怖を感じない種族だというのに矛盾した感覚は気持ち悪さを覚えるのだが——致し方ない。様々な経験が今の自分を形成している。その過程において新たな感覚を覚えてしまう事は想定外にして想定内の事態、かもしれない。

例外というものは予定調和をいつも崩してくるものだ。

◇ ◆ ◇

イビルアイは頭を覆うように身に付けている黒いローブから零れる金色の髪の毛をいじる。

長い年月の間にボロボロに朽ちて消える事無く存在してくれた髪。

炎に炙れば簡単に燃えて無くなるのだが、黙っていれば意外と丈夫な事に驚かされる。

——手入れは欠かさない。けれども、疎かにおろそにしがちだ。

女性として。人間的に振舞う上でも身だしなみは大事である。

「……………」

一般人であれば先を見通す事が困難な暗い中を平然と進めるのは暗闇を見通す魔法とマジックアイテム、それと種族的な恩恵が無ければ壁などにぶつかったりするところ

だ。——イビルアイはどの条件も満たしているので平然としていられる。

真昼のように——とは言いがたいが見ている景色はとても明るい。

人の気配が一切無い洞窟に一人黙々と進んでいく。

昔は大勢が暮らしていた——わけはない筈だ——ような事も僅かな期間でもあったのかもしれない。

詳しい事は分からないけれど何人かは利用していた筈だ。

風の噂などでは討伐依頼か何かで内部に侵入してきた冒険者によつて何らかの組織が壊滅したとか、しないとか。

放置していたイビルアイにとつて気にする程の価値も無い——のだが、僅かばかりの罪悪感があった。

遠い昔に置いたつきりにしていた厄介なアイテムのその後の末路とか。

◇ ◆ ◇

今から二百年とも三百年とも思われる昔——

イビルアイ自身は正確な年月はとうに思い出せないのだが、確かにそれくらい昔の出来事だったのはおぼろげながら思い出せる。

かつて大切な友人と旅をしていた——筈の淡い出来事の欠片。

自分がまだ『キーノ・ファスリス・インベルン』と名乗っていた頃だ。

(……まだイビルアイになる前の小娘キリーだった頃……か……)

自身が身に付けている白い仮面をさする。それには額部分に赤い宝石がはまっていた。

世間体を気にして顔を隠すようになったが、仲間内では結構見せている自身の顔——
過ぎた期間を悟らせない少女の顔かんばせが今もある。

死人のように白い肌で妖しく光る赤い瞳。油断すれば漏れ出る牙。——牙は簡単には表に出ない。それほど長くないのが幸運だった。

(当時の記憶が実に曖昧で困るのだが……。良い思い出は都合よく脚色されるもの……。それはそれで困った事態だ)

頭に水滴を受けつつイビルアイは苦笑する。

落ち着いた時期に自伝でも書こうかと思っていた時、はつきりとした過去を思い出せないことに気付いてひどく落胆したものだ。

空想と現実の区別が付かない時期というものは実に都合が悪い。

自分は何の為に生きているのか。その最も大事な時期の事を思い出せないのであれば滑稽以外の何ものでもない。

(ぼんやりしていた時期に行おこなった様々な出来事が後世で様々な弊害を生んでいる……。というのは理解した)

だからこそ過去を振り返りたくないの tochやんと振り返って記録をしたためたい気持せめちが闊せめぎあつた。

自分にとって大事な事が確かにあつたはずなのだ、と自分に言い聞かせる為に——今のイビルアイを形作る上で避けては通れない過去と向き合う時期に来ていた。それなのにぼんやりしか思い出せないのでは意味が無い。

同じ時代を生きていたであろう友人など——居ないに等しいほど——ごく少数。更には自分が物心つく前に付き合っていた人物のことを思い出せなくては後の物語にも影響が出てしまう。

ある日突然に自分が生まれたわけではない。

何かがあつて今の自分にたどり着けなければならぬ。

そうでなければ自身が歩んだ道の前半が幻想に消えてしまう。それはどうしても嫌だと思つた。

◇ ◆ ◇

時々独り言を呟きつつ洞窟の最下層にたどり着いたイビルアイ。

深さ的にはそれほど距離は無いのだが、ここは一般人がおいそれと侵入できない隠れ家だ。

まず入り口は重い棺桶で蓋をしている。物理的な破壊で障害を取り除けなくはない

が後で塞ぐのが大変になる。

(……昔とあまり変わっていないな……)

天井に繋がる柱状の鍾乳石が何本もあり、人工的な階段が自然物を冒流している。

階段は利用者の為に掘り進んだのだから仕方が無い。

所々の人工物はここがいかにも秘密基地であるという証拠だ。

円形に広がる場所には魔方阵が描かれている。多少、擦り切れているが何度も何者か書いては消してを繰り返した跡が伺えた。

イビルアイ本人は覚えていないのだが、何人かの人間と共に利用していたのかもしれない。

奥に行けば集会場のような部屋が現われる。——そこには当主の為の石で作られた玉座や祭壇が設置してあるはずだ。——何者かが破壊していない限り。

様々な儀式を執り行おこなったような気がするのだが——

魔方阵の中央には特殊なアイテムを設置していた。——それが無いということは破壊されたか、何者かが持ち去ったと思われる。

二百年ほど放置したアイテムがどれほどここにあったのか——、盗掘が早い段階ならば脅威とは言えない。逆にごく最近までここにあってたのであれば相当な脅威になっている筈だ。——だが、この洞窟がある大都市『エ・ランテル』は今も変わらずに存在し

ている。それはすなわち脅威となるアイテム『死の宝珠』の影響を受けていない事を意味する。

負の想念を力に変える意思あるマジックアイテムだ。

「……………」

しばらく探してみたものの他の石ころと見分けが付かないアイテムなので魔法の恩恵があったとしても搜索は困難を極める。——呼びかけても何の反応も返って来なかった。

無いのであれば仕方が無い。何処かで暴れていれば嫌でも自分の耳に入る筈だから、それまで放置してもいいか、と思うことにした。——案外、誰かが脅威と判断して——

◇ ◆ ◇

早々にマジックアイテムの搜索を諦めたイビルアイは洞窟の最奥に向かう。物静かな佇まいなので誰も居ないと判断する。

この奥にあるのは儀式用の祭壇——。それと簡易的な玉座だが、それが今もあるのか
 かつて誰かの為に用意したであろう石造りの玉座——

「……………」

それは今も健在のようだ。そして、目的の玉座には誰も座っていない。

当たり前のようで何者かが隠れ家として使っていることも考慮していた。

何も無い事に喜び、同時に寂しさを感じた。

前に暮らしていた時代から二百年近く経過している。それでもここだけは何も変わっていないと信じていた。

だが、時代は残酷だ。

時間経過と共に様々なものが朽ちていた。

長い期間、湿気に晒されていた為に壁に掛けてあった調度品は腐り落ち、金属は錆び切っていた。その中で目新しいものは殆ど無い。

金目のものは持ち去られていたり、何所かの泥の中に埋まっているのかもしれない。

それらを探す気は無く、ただ真つ直ぐに玉座に向かう。そして、イビルアイはその椅子に座った。

◇ ◆ ◇

今日が初めての事ではないけれど、何度か座っていた時代を思い出そうとした。けれどもやはりおぼろげなものしか浮かばない。

確かに自分はこの地下空間の主であり、同時に誰かをこの玉座に座らせていた経験もある。

(この場所で私は何らかの組織の長に収まっていたのだろうか……。それとも単なる

「ごっこ遊び? ……そんなことはない筈だが……」

時代は残酷なものだ、と小さくつぶやくイビルアイ。

かつてキーノと名乗っていた時代の事を殆ど思い出せないのは実に勿体ない、と。

全てではないが——、それでも失った時間があるというのは残念極まりない。

「(……で自分が行^{おこな}つてきた事が後に悪しき組織に利用されていた。それこそが『ズーラーノーン』……)」

時代と共に名称が薄れ、それしか思い出せなくなった残りかす。

それでも当時の自分には縋りたい一心の表れだったような気がする。

最初に眷属にした者が後に大きな組織へと成長させ、今も別の拠点で悪巧みをしているかもしれない。そう思うと罪悪感が襲ってくる。

そうだとしても悪の道に進んだ者の身代わりにはなりたくない。それは行^{おこな}つた者の責任であり、作^{イビルアイ}つた者は早々に手を引いている。

イビルアイは最初から最後まで責任を取るような善人ではないことを自覚している。

「(……悪の組織の親玉はとつくの昔に居なくなっていた。そういう結論があつても組織として維持されていたのは……、何者かが存在しない盟主を祭り上げて活動していたことに他ならない)」

名前も姿も分からない盟主を頂くズーラーノーン。

その構成員は支持を集めて何を企んでいたのか、イビルアイには窺い知れない。

置き土産として残したアンデッドモンスターがどういう使われ方をしたのか——それも興味は無いのだが——今となつては知る術もない。

◇ ◆ ◇

誰も居ない空間を睥睨するイビルアイ。

キノノとして活動していた期間のほうが遙かに長いけれど、半分以上はおぼろげな記憶に支配されている。

自分が自分であると確定できた日より前——

アンデッドモンスターである吸血鬼ヴァンパイアになる前の自分の人生の殆どは闇の中——

(とある国の哀れな姫君が邪悪な魔法詠唱者マジック・キャスターによつて……。ではないな……。自らの生まれながらの異能の暴走によつて……)

原因がなんであれ、国を一つ滅ぼした事実は変えられない。

それから自暴自棄になつて各地をさまよい続けた。

その辺りの記憶がすっかり抜け落ちていようだ。

(……: 当時はやさぐれていた……。のか。もつとお淑やかな少女であつた……。場合も……)

だが、何があつたのか曖昧である。そうイビルアイは苦笑しながら思った。

玉座に座つて仲間や部下達に命令していたのか、それとも単に一人で過ごしていたのか。

いや、一人ではなかつたはずだ。

誰かと共に旅をしていた。

(……そう。大切な友人と共に……)

聞く者の居ない洞窟の片隅で呟くイビルアイ。

見つめる先には暗黒しか無い。

ここには華々しさは皆無で、ひたすらに空虚だ。

祭壇は何の為に設置したのか。

殆どを思い出せない。

脳が腐ってきたのか、それとも単に年を取つたとしても言うのか。

老化しないアンデッドモンスターたる吸血鬼ヴァンパイアの自分が、と。

生きながら死人である為に信仰系の魔法を苦手とするもある程度は生者と同じ事が出来る。そこが完全な死体と違う点だ。

心臓こそ止まつてはいるが、腐敗臭を振り撒いているわけではないし、多少の飲食に不都合は無い。

血を欲する衝動が起きないのは死んでから吸血鬼ヴァンパイアになつたわけではなく、特殊な条件

によつて得た——得てしまった特異体質のようなもの。

ここ最近は本当に人間的な暮らしを送っている。更にはこいわずら恋煩いまで起きた。人生は無駄に長くて退屈だと思つていたが、存外悪くはないと思えた。

◇ ◆ ◇

様々な経験を得て——原点回帰の意味で——過去を振り返る事にしたイビルアイがかつて放置した拠点に舞い戻り、そこで見たのは伽藍堂の空間だった。

かつて大勢の手下とも呼べぬ者達を従えていた——のかは定かではないが、確かに自分はこの中で何らかの活動をしていた。

その主目的は果たして何だったのか——

(……普通に考えて私が盟主だよな……)

悪名高い秘密組織を束ねる盟主——

そういう風に祭り上げられた姿無き主——

ズーラーノーンの盟主キーン。

前の名前を知る者は自分が知る限り、数人ほど。それも二百年以上も昔だ。——大半の時を偽名としてのイビルアイで過ごしてきた。

普通の人間であれば生きている事が奇跡に近い。

だからこそ盟主の情報を持つ者はごく限られてくる。

名前だけを利用して組織運営していた者が居ても不思議はない。

室内の様子を見る限り、壊滅させられていると思われ——イビルアイとしても何だか申し訳ない気持ちになってくる。

自分が導いていけば悪の道に進まなかった、とは言わないが——

間違った方向に進んで命を散らした者——者達に哀悼の意を捧げることくらいはしてやらなければ、その魂はきつと浮かばれない。

もちろん、悪党に同情するわけではない。

——被害者の為のものだ。



祭壇の前で跪いて祈りをささげる。これは仲間の祈りを見よう見真似おこなで行っているだけのもの。

自分は聖者ではなく、人も殺す冒険者だ。

綺麗ごとだけで世渡り出来ないことを知るイビルアイである。



見も知らぬ者達への祈りを——簡単にだが——済ませた後また玉座に座った。

時間は今日の為に取り替っている。一週間でもこもれるが——果たして、それだけで何を
得る事が出来るのか。

かつての自分の情報を——

イビルアイは秘密組織ズーラーノーンが拠点にしていた——大都市エ・ランテルにある共同墓地の霊廟の地下空間——場所で過去を振り返る試みを始めた。

二百年とも三百年とも知れない長い時——

それは人間では計り知れないもの。不死性のクリーチャーにとつてはつい先日にも感じる長さに過ぎない。

なまじ人間的思考が出来る者にとつては拷問にも匹敵するが——

かつて『キーノ・フアスリス・インベルン』であつた頃の自分の事について思い出せる事は驚くほど少ない。

特殊な生まれながらの異能トの影響で記憶があやふやになっている為だと思われる。けれども、それでもいくつかの断片は思い出せる。

特徴的で刺激的で二度と忘れまいと誓つたことなどは——

◇ ◆ ◇

事の起こりは不明だが——と、その前に——イビルアイは付けていた仮面を取り外し、天井を見上げる。

漆黒に近い閉鎖された洞窟の天井。地下水が粒となつて下に落ちる音が静かに聞こえる。

この場所を最初に見つけたのはどちらだったのか。

大事な事も忘れているのは如何なものかと自分自身に呆れてしまう。

(……もう三百年近く……になるのか……)

不死性の吸血鬼^{ヴァンパイア}となつて二百五十年。それからしばらく冒険者として活動して数年が過ぎた。

ここ最近は怒涛の展開が続いて忙しさに悲鳴を上げる始末。——吸血鬼^{ヴァンパイア}となつたにもかかわらず、だ。

忙しさの原因は長く不明だったが未知の高難度モンスターの出現によるものと推測している。

それも今まで何処に潜んでいたのか分からないのがおかしいと思えるほどの凶悪で強力な者達——

よく世界が滅びなかつたと思議に思つたほどだ。

(……全てはモモン様と……魔導王の活躍のお陰だが……)

他人があれこれ詮索したりするけれど国を守ってくれた事は事実として受け止めねばならない。

イビルアイとして完全に相手を信用していたわけではない。ただ、信じたくない事があ
るだけ。

どんな人間にも裏があり、打算あり気で生活している。

完全無欠の完璧超人など存在しない——。そう思って今まで生きてきた。

モモンも例に漏れず、人には言えない過去などを持っているようだった。——いや、
確実に持っている。

だからそれを責める材料にはしない。

それもまたその人の人生の表れなのだから。

目蓋を閉じて過去への扉を開くイビルアイ。

しばし思索の旅路に身を委ねる事にした。

S O O 1 キーノ・ファスリス・インベルン

とある国に金髪碧眼のお姫様がおりました。——物語の開始にありがちなものだが、それでもイビルアイことキーノにとっては全ての始まりだ。

平和に暮らしていた筈の日常は壊れ、気が付けば吸血鬼ヴァンパイアになっている自分。

長い旅をしてきたようで思い出せない事がとても多い。

「君の名前は？」

豪華なローブを身にまとう存在が声をかけてきた。しかし、当時は何らかの原因でひどく知性が低下していた。それゆえに応答に不自由した。

懸命に考えても混乱する頭では唸ることしかできなかつた。

「……あうあ……」

最初はこんなものだった。

それから随分と時間が経ち、相手もちゃんと待つてくれたようで質問に答えられた。「なまえはキーの・ふあすりす・いんべるん」

つたない幼児の言葉に相手は安心したようだ。

表情は窺えないが人当たりのよさそうな男性だと——感じたのも一瞬だ。

自身もそうだが相手もアンデッドモンスター。

その顔かんばせに肉は無く、白磁のような頭蓋骨が露出していた。

「ここが何処なのか聞きたいのだが……。君はアンデッドのようだし……。困ったな……」

周りは廃墟と化した建物しか無い。

ここは廃棄された大都市『ガテンバーグ』——。人間の国であったがとあるきつかけにより壊滅して久しい。

現在の三大国家が現われる前の時代——に存在していた人間の国の一つ——

「現地の情報を持っていそうにないけど……。一人で探索するよりはマシか……」

骸骨の人物は独り言を何度も呟き、納得していく。その間、キーノはただ相手を見つめていた。

自身が何者で何を目的としているのか分からなかった時代であった。

◇ ◆ ◇

旅のお供としてついて行く事を了承したキーノは骸骨の顔を何度も見つめた。

白骨死体が珍しいというよりは自身がアンデッドゆえに親近感が湧いて仕方が無い。

物腰は柔らかく、言葉は割りと丁寧であり、好感の持てる人物だと感じた。

名前は確か『サトル・スルシャーナ』といった。

聞きなれない名前のためにこれが正しい名称なのか、当時は本当に分からなかった。アンデッドのサトルはとにかく凄いの一言に尽きる。

魔法に精通しており、様々なことを教えてくれた。——しかし、キーノからは何も教えられなかった。何も知らず、何も覚えていないゆえに——

全てでは無いとしても自分から言えるような情報が全くと言っていないほど無かった。

「……都市に生存者は無く、ただ動死体ゾンビが徘徊するのみか……」

「……おおきなたたかいがあつたからだとおもう」

「戦争か……。しかし、それで動死体ゾンビが発生するというのは……」

うくと唸るサトル。

博識の彼は度々、物思いに耽る。それをキーノは邪魔せずに眺めた。

二人旅はその後も続き、他の国や都市に向かうこともあつた。——その時は仮面を被つて旅の魔法詠唱者マジック・キャスターと付き人のような気分で各地を巡つた。

キーノ自身も友達が出来たような気分で嬉しくなっていた。

自分の身に起きたことを忘れるくらい——

◇ ◆ ◇

それから一年が過ぎようとしたある日、冒険者になろうとサトルが言い出した。

いつまでも二人では寂しいと。

それと他の仲間を入れて知識の幅を広げようと考えていたようで、キーノも反対しなかった。

サトルは様々な魔法から人間に偽装し、パーティメンバーを募る。

「俺は魔法には自信があるけど戦士系は苦手なんだよな。せいぜい振りくらいしかできない」

「……それでパーティを組んで各地を回るの?」

「……が何処なのか知る上で、な……。世界を知って、それから今後の身の振り方を考えようと思う。時間はたっぷりあるけれど……。人間社会はまだまだ未熟だから……」

苦笑を浮かべる顔は人間のもの。

偽装しているとはいえ——誰か——基にしているのか訪ねたい気持ちがあったが、それを知ってどうするのかという疑問により諦めた。

変に知ってしまうとサトルの正体をどこかで喋ってしまうおそれがあるからだ。

赤い瞳である自分も偽装しなければアンデッドモンスターだと看破されるというので、正体を隠蔽する指輪をサトルから借り受けた。

姿は変えられないが魔法による探知などを阻害してくれるという。

「キーノもチームに参加すればよかつたんじゃないか?」

「……私も仲間として相応しくないというか……。ボロが出そうで……」

それに仲間が流血した場合、吸血鬼ヴァンパイアとしての特異能力が勝手に発動するかもしれない。そうなればもう仲間として付き合う事は難しいと思っっている。

今のところ吸血衝動は起きていない。けれども胡坐あぐらはかけない。

適度に食事を摂るように心がけている。——そのお陰か、飢えには苦しまずに済んでいる。

◇ ◆ ◇

サトル・スルシャーナと呼ばれる男から様々なことを学び、キーノは魔法詠唱者マジック・キャスターとしての道を歩み始めた。力仕事が悪手だったこともあるし、魔法にとっても興味があった。

サトルが大抵の魔法の知識を持っていたことも幸運で、第五位階までの知識を早い段階から吸収する事が出来た。

「死の神スルシャーナと同じだと言われているけど……。いやいい、スルシャーナで」

どうせ、サトルとしか呼ばれないし、と何やらサトルはがっかりしたようだ。——キーノは理由が分からなかった。

随分と学習した筈なのだが、何が間違っているのかサトルはついで教えてくれなかった。

「その……死の神は実在のものなのか？」

依頼の無い日にとある宿屋で質問を受けたキーノ。

自分が知る限りの情報を互いに交換していく。

サトルは大人で割りと大柄な人物。対するキーノはそこらの子供と遜色ない背格好だ。しかもアンデッドとなったので成長が——全く——見込めない。

「そうらしいね。八欲王に最後に殺された神様つてことになってる。姿は……サトルの姿に特徴がよく似ている」

「……つまり死の支配者か……。今までそれに類するモンスターに出会った事がないな。せいぜい死の大魔法使いだ」

この死の大魔法使いというモンスターは一般には最上位の危険な相手だと認識されている。

ランクで言えば白金級以上。

難度は六十から八十までと幅広い。

キーノにとっては脅威でもサトルにとっては雑魚モンスター扱いされている。——
実際、その通りなのだが——

日銭を稼ぎつつ様々な情報を得て数年——。二人の旅はじつにのんびりしたものだった。

仲間については検討だけされていたが本格的な始動はまだ少し後になる。



自分の事を多く忘れてしまったキーノだが、それでもサトルは構わないと言っていた。代わりに彼の事を色々教えてもらう機会があり、そのお返しとして諜報員のような仕事を頑張った。

姿の変わらない不死性のモンスターはいずれ人間の町では怪しまれる。それを避ける術を日々練っていた。

キーノだけならば耐えられるのだが、サトルにまで迷惑をかける事になっては困る。——せっかく出来た友達であり、旅の供だ。

そのせいもあって各地の都市で活躍するわけには行かなくなつた。

「隠密行動において不都合はないが……。キーノは構わないのか？」

「この魔法詠唱者という職業は身を隠すには都合がいい。サトルも引退を考える時は魔法詠唱者として過マジック・キヤスターごせばいいよ」

「その時はそうさせてもらおうよ」

「死の神スルシャーナはあらゆる死の体現者であり、畏敬すべき存在だ。だからこそ人々は信仰の対象としている。……国によつては存在を否定されていたりするけど」

サトルは度々——もし推測通り、死オーバーロードの支配者であればそう簡単にくたばるわけではないのだが——独り言を呟いていたが伝説や伝承の中で語られているので真実は見えてこ

ない。

殺された。隠れた。消滅した。

各説話の最期は様々な解釈で締めくくられている。

「取得している種族や職業構成が気になるが……。それを退ける八欲王とはとんでもない奴らだったんだな」

数多の竜 王を屠り、世界を——一時的とはいえ——征服した超越者達。

そんなことが出来る存在はサトルの記憶では『世界王者』くらいではないかと推測していた。

だが、仮にそうであつたら疑問が残る。

最上位プレイヤーが竜 王ごときに敗北するのか、と。

複数の敵との相対による補正が働いていたとしても負ける要素があるとは思えない。その根拠として各世界王者にはそれぞれ一撃必殺の職業特殊技術を持っている。

自分の知る技は空間を直接切り裂き、範囲内に居るクリーチャーに大ダメージを与え続けるものだ。

影響がしばらく残る為、まともに攻撃を受けてしまえば即死してもおかしくない。

効果が一瞬の第十位階が劣化版として存在しているが、それとは比べるべくもない。



考えられる点として有力なのは八欲王の敵が彼ら自身であったというものだ。

最強の敵は——やはり最強の力を持つ彼ら自身だ。

仲間割れによる戦力ダウン——

それでも最後に生き残りが居る筈だ。——その最後の一人に対して残る竜王ドラゴンロードが一斉攻撃を仕掛けた——というシナリオならば勝利の条件を満たすのか——

推測しか出来ないし、今の世は彼らの勝利に終わっている——事になっている。

「……その戦いで多くの竜王ドラゴンロードが数を減らした……、という話に辻褃が合うのか……」

「全体の数は減っているのは確かだそうだよ。……戦いに参加していない竜王ドラゴンロードも居るそうだし」

「件の八欲王くだんが世界征服した時に作ったのが……」

南方の砂漠地帯にある不可侵の国家『エリュエンティウ』がそうだとされている。

浮遊する都市とその真下にもう一つ都市がある二重国家。だが、その実体は遠く離れた国々には伝聞すらあまり伝わっておらず、謎の国家として有名だった。

国家であるならば交流が少なくともあるはずなのだが、それが無い。

その理由として国家を守護する存在が異常に強いこと。その守護者によって都市の情報は今まで漏れた事が無いと言われている。——もちろん例外もあり、侵入を許されたものがいくつか情報を持ち帰った事例があるので、かの国家の名前が後世に伝わって

いる。

「三十人近い屈強な守護者か……」

サトルの知識で該当するのは高レベル ノン・ブレイヤー・キャラクター N P C だ。

実際に観察してみないことには真実は明らかにはならない。何ごとも調査は必要だ。

何の対策もせずに突入するのはバカのこと。——時には無謀な賭けに出ることもあるけれど——

「……調べたい事がたくさんあつて退屈しない事は良いことだ」

「私もサトルと一緒に旅ができて楽しいよ」

「……それがいつまで続くのやら」

キーノは不死性のモンスターだ。——サトルも同様だが。

種族的な特性により実はキーノを大切に思えた事が少ない。——旅の供としているのだから努力は欠かしていない。

単なる小動物を愛でる程度にしか愛情は無い——サトルの中では——と思っている。

ちゃんと愛でて大切な仲間として迎えたいのに淡白な性格に自分自身嫌気が差す。

もし、肉体のある人間であつたら——例えば吸血鬼ヴァンパイアであろうと可愛い娘が目の前に居るのだから大切に守ろうと『漢』おとこを見せるべきだ、と力説しているところだ。

それなのに平坦な精神構造になる為に色々台無しになっている。——もちろん、自

業自得なのだ。



アンデッドモンスター特有の精神抑制は喜怒哀楽全てに適応されている。

心の底から喜びたい気持ちも悲しみみたい気持ちも一緒くたに――

戦闘や人付き合いに對して役に立つこともあるけれど、誰かと分かち合いたい気持ちはサトルとて持っている。

無理矢理な抑制は我がことながら呆れてしまう事態だ。

「……キーノは精神抑制は起きないのか？」

「んっ？　そういう事はよく分からない」

話ぶりでは喜びも悲しみも一般人と大差がないようだ。それはそれで羨ましい。

同じアンデッドモンスターでも種族によって差があるようだ。

本人が過去の記憶を失っているので詮索しても答えは出て来ないけれど――

「……………」

共に旅する仲間として迎え入れてモンスターの特徴という理由で切り捨てるのは非人間的だ。――外見などがモンスターだとしても心はまだ人間だという自負がサトルにはあった。

言葉で人間だと言いつけても現実問題としてアンデッドモンスターから脱却する事

は出来ないのだが――

◇ ◆ ◇

サトルはこの世界の住人ではない。

ある時を境に迷い込んだ異邦人だ。――それも自らが作り上げた仮想分身アバターの姿のままで。

キーノに言っても無駄だし、実は正体は何だ、と告げても意味があるようには感じない。

仮に告げたとしよう。

それ何って言われるのがオチだ。

彼女はゲームのキャラクターではない。かといってNPCでもない。

異世界に転移した。

言葉としては簡単だが、本当の自分中身ではないところが問題だった。

自分の本当の姿は人間である。それを自宅に残したままの転移だ。――全く意味不明の状況だ。

アバターがここにあつて自由に動いているなら自宅の方はどうなっているのか。

――数年も過ぎているので既に餓死しているのか。それとも精神が分離しているのか。で本体は本体で普通の生活を続けているのか。

確認する術が無いから困っている。——本体が死んでいた場合、今の自分が仮に死んだ時にどうなるのか。——アンデッドモンスターだから平気というオチは安直過ぎる。

少なくとも自分の本当の身体の状態を知りたくてたまらない。

焦る気持ちは強制的に抑制される。そうするとしばらくはどうでもよくなる。——
 どうでもいいはずがないのに。

(焦る気持ちと戦い続けて何年も過ぎてしまった)

手遅れなほどに——

諦める事も一案だが、サトルの気がかりとしては同じ境遇に陥った者の存在——また
 は有無——

出来ればギルドメンバーが望ましい。——だが、多くが引退してしまっている。

淡い希望を抱き続けるのも不毛だと理解している。けれども知り合いに合いたい。

その気持ちは今も小さく燻っている。

◇ ◆ ◇

活動拠点を北方の『アークランド評議国』に置き、南方の広大な森林地帯に向かう依頼をこなしていく。

自らが異形種である事を考慮し、バレても損害が少ない地域を選んだ結果だ。

キーノも評議国内では素顔で徘徊できるとあって、精神的負担軽減のありがたみを知

る。

「六大神が現役だった頃から存在している古い国の一つで何体かの竜ドラゴンロード王が治めている。

「そろそろ仲間を募りたいところだが……。どんなパーティがいいかな？」

人間の姿のサトルは旅の供であるキーノに尋ねた。——出来るだけ仲間に意見を聞くように心がけてスキンシップに励んでいた。

そうしないと今後の活動で不和を起こしやすからだ。

サトルは人付き合いに関して過敏なほどに神経質であった。

「凄い魔法が使えるのに……。細かいところがあるよね」

「……昔大勢の仲間を率いていたからな。それぞれの意見集約は俺の仕事だった。……ただそれだけのことさ」

仲間内での喧嘩は日常茶飯事。お互いの矛を収める仕事は主にギルドマスターたるサトルの仕事——

それを何年も続けていれば大抵の事は対処できる自信がついた。それでも出て行く仲間が現われると傷付くのだが——

「交渉は俺がやるが……。キーノはどうする？ 参加しない事も選択の一つだぞ」

「……うーん。まだ少し魔法の勉強がしたいな。……でも、強くないと発展しない

のも……」

サトルとしては小さな女の子に血生臭い仕事をさせたくないだけだった。

それが異形種であろうとも——

口にするに恥ずかしくて強制的に精神が抑制されるので、黙っている。

冷静になれば迂闊に言いそうになる事もある——だからこそ恥ずかしいので。

◇ ◆ ◇

いざ仲間募集——といっても簡単に現われるわけは無い。というか簡単に現れては困る。

有象無象の輩に用は無い。——サトルの基準に合格しない者は特に。

大所帯でも困るが——最初は四人か五人から。——これは基本のパーティ数だ。

「俺のパーティに参加しようと思つた動機は何です?」

冒険者組合の一室を借りての『面接』が始まる。

組合に申請すれば部屋を貸してもらえるので、早速利用するサトル。

側で見ているキーノはサトルのやり方を不思議そうに眺めた。

(めんせつって何だろう?)

あまり学の無いキーノにとってサトルの行動のほとんどが新鮮に映っていた。

彼は今までの人生をどう過すごしていたのか、とても興味がある。しかし、個人の過去

を詮索するのは冒険者としての規則に抵触する——気がする。

人に言えない過去は誰にでもあるから。

戦士職のはずのサトルは事務方の仕事がとともよく似合う。冒険者以外でも充分に働きの口が見つかるのではないかと思わせるほど。

言葉も丁寧で人当たりも良い。

住民達からも信頼を得ている。——亜人や異形種の多い国にしては珍しい人種だと噂されていた。

実際、様々な種族に対して分け隔て無く接している。

見かけは人間でも中身は骸骨のアンデッドモンスターだが——

◇ ◆ ◇

一般的なアンデッドモンスターは生者を憎む存在、というのが世間での常識だ。——
その中にキーノも含まれるが——

それが表裏の無い、好感さえ抱かれる者が不死者そうだと誰が思うのか。——キーノもそれ
に関しては驚いている。

どういう経緯を持ってアンデッドモンスターとして存在しているのか。それに関して色々聞いた覚えがあるのだが、専門的な言葉が多かったので理解出来た事がとても少ない。

脳味噌が腐りかけているせいかと思つたほど自分の無知さに嫌気が差す。

「うちのメンバーに必要なのは簡単に死なないことです。……それと裏切らないこと」
 本当は後者が大事な事だとサトルは言つていた。それを後ろに回す意図はキーノには分からないが、彼なりに何か考えての事だと思われる。

人当たりの良い人物にとつて怖い事は裏切られること。嘘よりも重いという。

常に疑心暗鬼のまま暮らしたくないから。

そう言つていた事を思い出す。

サトルにとつて信頼に足る仲間の存在は何者よりも重いものという認識があり、それを求めてしまうから仲間が集まりにくい。

既に二十人は追い返している。

仲間の中にキーノが居る理由はどういうことなのか、聞いてみたいけれど怖いとも思う自分がいる。

サトルが信頼できるから、ではなく自分がサトルに信頼されていない事を知るのが――
 茫然自失の自分を見つけて仲間に入れてくれた彼の信頼に応えたいという気持ちはある。――けれども実力が足りずに足を引っ張る結果にただただ辟易する。



ある日、何気なく尋ねてみた。

自分はサトルの仲間としてどうなのか。——相応しいのか、という言葉は使わなかった。

「拾ったペットの面倒を見るようなものだ。……俺は自分が決めたことに最後まで責任を持ちたい……。ただそれだけだ」

男らしい言葉なのだが、ペットという言葉がいまいち理解出来なかった。

聞き慣れない言葉なのか、彼独自の言葉なのか——

「……女の子を一人で放浪させたくない……が正しいか。お互い道に迷う者同士だ。助け合い精神で行こうと決めた」

「それだけ？ サトルにとって私が利用価値のある人間だった……、ということはない？」

「仮に価値ある人物だとすれば良い拾い物をしたと嬉しがるどころだ。キーノは優良物件として破格の待遇が必要な存在だ。それを手放す気は無いさ」

人間に偽装した彼は笑顔で言った。

これが本来骸母の顔であれば全く表情が読めなくて困っている事態に陥る。

そう考えれば表情の読めない相手に四苦八苦する自分が容易に想像できるとい

の——

「あまり深読みしてほしくないのだが……。俺としては最初の出会いを大切にしたいだけだ」

「そうおっ？」

最初の出会い——

キーノにとって記憶が不鮮明の時代——

何かがあつて何かが起きた。その過程の殆どが曖昧に満ちている。

おぼろげに覚えている事は何処かの都市を滅ぼす原因を作ったのが自分（キーノ）ということ。

今はサトルのマジックアイテムのお陰で平気だが、吸血鬼（ヴァンパイア）であること。

彼との出会いは唐突だった。

もしかして彼のせいで今の自分が形成されたのではないのか、と疑つた事は——ある

にはあるが——荒唐無稽すぎて納得できない。

都市を滅ぼすようなアンデッドが冒険者をする理由に繋がらないためだ。

実際、彼の目的は無いに等しい。——いや、あるにはある。

この世界を知ること。

もし、それが事実なら国を滅ぼす理由が無い。

様々な魔法の実験がしたいから、の方が余程説得力がある。

それら全てが欺瞞工作だというのであれば彼の真の目的とは何か——

それを知る事がキーノにとって有益になるのか。

未だに分からない事が多いキーノにとってサトルを疑う事はとても——有益とは思えなかった。

◇ ◆ ◇

出会いからしばらくは目的を定めずに彷徨い、適度にモンスターを倒したり、サトルから色々な事を教えてもらいう毎日だった。——だからこそ無益にしか思えない相手に知識を与える意味が分からない。

戦力にするでもなく——

話相手以上の関係にもなっていない。

寝食を共に——飲食不要だが——し、色々な街を巡った。その日々は何かを利用するため——とは到底思えない。

キーノの持っているアイテムの殆どはサトルのものだ。自分のものはせいぜい最初から身にまどっていた服装くらいだ。

「……そんな私がサトルを裏切ったら……きつと怒るよね?」

「当たり前だ」

声は大きくなかったけれど、力強く言われた。——それだけで萎縮しそうになる。

彼の怒りは冗談ではない事が窺えた。

「ま、まあ俺の方から裏切る事も……無いわけじゃないよな……。キーノを悲しませた気持ちはないぞ。……せつかく出来た……」

後半は尻すぼみになって聞き取れなかったが、雰囲気的には恥ずかしがっているようだった。

長く付き合ってきて彼の反応はだいたい分かるようになってきた。——それは喜ぶべきことなのか、それとも彼を特別だと思いつ始めているのか。

後者だとしてキーノに何の得があるのか。

彼女自身はまだ世間を知らないために理解出来ない事柄が増えて混乱の極みだった。

自分の事もままならないのにサトルの事をどうこう言う資格は無いなど苦笑するキーノ。

◇ ◆ ◇

二人旅にも限界があると感じたのはキーノよりもサトルの方だったので、それを尋ねてみた。

確かに人数が多ければ様々な事に対処し易い。その一貫かと思っていた。

「それもあるが……。自分を隠蔽する手段にしたいのさ」

「はっ?」

サトルはとても賢い。キーノは知性が足りない。

それを思い知らされるとぐうの音も出ない。——悔しい限りだ。

いずれ賢くなつて言い負かしたいとキーノは誓う。

自分がチームを率いる時は指揮官職業（クラス）を得たいと——

「今は二人で俺がサトルという名前で活動している」

「うん」

「人数が多くなればチーム名で呼ばれるようになる」

「うん」

生返事に対してサトルは不機嫌を現わすように唸つた。しかし、キーノも他に言いようが無かつたので仕方がない。

理解しようところちかも必死だ、と無言の反撃を試みるキーノ。

口を固く結んで次の言葉を待つ。

さあどうぞ、と手だけ前に出した。

「個人名からチーム名に移れば俺がメインで活動しなくて良くなる」

今までサトル主体で活動してきた。それはつまり活躍すればする程サトルの知名度が高くなる。

目立ちたい性格ならばそれでいい話だ。しかし、サトルは地味な活動を好む。

高い身長や身体能力のせいで必然的に目立ってしまうけれど、それを抜きにしても活

動に支障が出るような事は避けたいと思つていた。

キーノとしては目立つところこそが冒険者としての責務と同義ではないかと言いつ返してみた。

「……いやまあ、それはそうなんだけど……。目立ちすぎると世間的に煩わしくなる。……あと、余計な敵が生まれやすいんだ」

特に他の冒険者に疎まれたり、自分の知らない内に敵が出来ていたりとか。

あくまで普通の冒険者として慎ましやかに生活したいのがサトルの願いだった。——
——中身が強大なアンデッドモンスターなのに——

「……時々サトルが分からなくなる。別に活躍して名を馳せてもいいんじゃないの？」
「……うう。メリット、デメリットがあるからなんとも言えん」

一人で難しい事を考えている事は理解出来た。

キーノはサトルの力になりたいのだが、どうすればいいのか分からない。
人生の師であり、支えてくれる友人としてどんな言葉を掛ければいいのか——

§ 002 サトル・スルシャーナ

キーノ・フアスリス・インベルンは述懐する。

もし——一人であればとつくの昔にモンスター共に廻られ、死んでいるか他の冒険者に討伐されている。

知性が随分と戻っていても一人で彷徨い続け、あちこちで追われたり追い払われて討伐隊を差し向けられる事態もあつたかもしれない。

途方に暮れて盗賊まがいになつてゐる事もありえだし、頭の悪さを漬け込まれて悪の道に引きずり込まれてゐたとしてもおかしくない。

サトルという光明は自分にとつてかけがえのないものだ。

そう思えるほど、彼を大切だと思つてゐる。

その彼が何やら困つてゐるのであれば力になりたいと思うのが普通だ。——いや、当たり前だ、が適切か——

しかしながら自分は無知ゆえに良い案が浮かばない。

言葉はちゃんと言えてゐるし、世間並みの常識もすっかり持つてゐると自負してゐる

筈なのに――

戦略とか対人関係の付き合い方とかに關してはまだまだ不十分だと認めざるを得ない。

そこは彼の手腕に何度も助けられているのでよく理解していた。

一人ではまだ何も出来ない小娘であると――

◇ ◆ ◇

キーノが苦惱している間もサトルは着々と計画を練つていく。

一見すると彼女を蔑ろないがしにしているように映る。けれども彼とて他人の機微は――ある程度は――感じ取れている。

言葉にしなければ伝わらない気持ちというものは知っている。恥ずかしい一念がある限り、彼女を困らせ続けるのではないかと思つている。 恥ずかしい一念がある限り、彼女は少女だが、仲間だ。それを忘れない為に適度に声はかけている。

ただ、それがどうもちゃんと伝わっていない気がしてならない。

――当たり前だが、ゲーム以外の人付き合いの中で女性に対応する方法を苦手として
いる。

恋人を作つた経験が無い。あつてもゲームの中の幻想だ。

リアル彼女の付き合い方など知るわけがない。

——ギルドメンバーに女性陣が居なかったわけではない。その時は多くの仲間達が居たから苦難を乗り越えられた。——それと女性と言っても見掛けは異形種だ。

「今日もろくな奴が居なかった……」

「お疲れ様」

何気ないキーノの言葉。聞く分にはとても耳に優しく届く。

もう少し年齢が上であれば気軽な挨拶自体に抵抗を感じたり、他人行儀に戸惑うところだ。——極度の緊張の度に精神が抑制されると思うけれど——

お互いにアンデッドモンスターなのに新鮮な気持ちでいられるのは不思議な気分だとサトルは思う。

思えば彼女を見つけてから随分と経った。

一緒に世界を知る旅を始めてから未だに他人扱いは失礼かな、と。

精々が妹だ。恋人というには見掛けが酷過ぎる。特にサトル側は白骨死体だ。

「……………」

名前で呼び合える仲なのだから、これはこのままでもいいかもしれない。

無理な背伸びは火種へのフラグとも言える。

だが、それをいつまで続けるつもりだ。

そう問いかける自分が居る。

悠久の時を生きるアンデッドに終わりなど実際には無いに等しい。

その身が減びるまで——

キーノは特にそうだとと言える。

自分とは違い、本物のアンデッドモンスター——だと思っけれど——はこの先も生き続けなくてはならない。

百年、千年先も。

気の長い時の流れをまともな精神で過ごせるものなのか、とサトルは自分に尋ねてみた。答えは考えるまでもなく、無理だ。

彼はまだまだ働き盛りの年代だ。急な老後は想定していない。

いくら元の世界が生きるのに辛い所だとしても——

◇ ◆ ◇

今の精神構造ならば案外平気かもしれない。けれども——けれども——けれども——

何度否定してもはつきりしない答えが先に待っている。そして、それに手が届かない。

キーノは学が無いからこそ先の将来にまだ不安を覚ええない。いや、知的レベルではあまり大差がない。

サトルはゲームの知識だけは一般人を超えている、という程度だ。

一般常識は彼女とそう変わらない。

「……キーノは冒険者以外で何かしたい事はあるのか？」

面接をしないと決めた日の午前中に尋ねてみた。

大事な事を聞く場合は何ものよりも優先されるべきだと判断した。

安宿暮らしにすっかりと慣れきっていて二人で過ごすことに何の抵抗も感じなくなっている。——羞恥心という部分ではとてもありがたい雰囲気である。

「サトルと旅をする生活以外は……」

うーん、と唸るキーノ。

二人っきりの時は素顔を晒す。

成長しないとしても年齢で言えば成人に近いのではないかと。しかし、どれだけの時を過ごしたのか、ここしばらく分からなくなってきた。

暦を調べれば早いのだが、知りたくない事実を知ってしまいそうで怖かった。

何故かと言えば、時の感覚がどんどん薄れているからだ。

時間に追われる定命の生き物ではないので。

無限に近い時を自由に使えるアンデッドモンスターは不死の特性で時間感覚が狂うようだ。——といってもそう思い込んでいるだけかもしれない。

「知識は十分に得ただろう？　もう俺に依存する必要は無いんだぞ」

「……サトル？」

彼女はもう自分と共サトルに旅をする必要性は無い。ならば、自由に生きるべきだ。それが普通の流れだと思った。

自分の個人的な感情で他者を束縛していいはずがない。

（俺はギルドマスターとして出来る事をするだけだ。そして、今までそうしてきた）
強い責任感がサトルの中で燃え上がる。

しかし、それもアンデッドの特性で抑制されてしまう。

「……確かに……。依存しているのかもしれない。けど……。私には他にあてが無い……。どこにも私の居場所なんか……」

「……少し言い過ぎた……。すまない」

居場所はこれから自分で見つけろ、というテンプレートが浮かんだ。しかし、そんな事をすぐに出来るわけがないとサトル自身が否定する。

同じ事をよく言われた経験則からだ。——いや、そういう言葉をよく聞くシチュエーションを知っているだけだ。

無責任な言葉だどつくづく思った。それを自分が言うのは違うと思ったから謝る事にした。

言えるわけが無い。そんな無責任な言葉など——

しばし気まずい空気が流れる。それもまたサトルにとってはよく知る感覚だった。仲間内の不和では度々起きる。

その解決策は簡単ではないし、慣れたいとも思わない。



キーノを放り出して自分だけ先に進むのはどう考えても嫌な奴だと思う。

もし、他人がそうしている場合は嫌悪感を抱く。

たまたま見つけたから、という理由で連れ回して捨てるのは——



何だ、このクソ野郎は。

我が事ながら呆れてしまう。

恋人ではないし、妹でもない。そうであっても、だ。

旅の供に決めた相手を大事にしないのは如何なものか。

押し付けられたわけではない。自分で連れて行くと決めたのだから。

面接を中止して数日間、キーノと共に街を散策する日を送った。——ある程度の蓄えがあるから冒険者の仕事をしなくても問題は無い。

「……………唸ってばかりだね」

キーノの言葉にハツとして意識を現実に戻す。

自分はどれくらい唸っていたのか。今はいつなのか忘れるほど自分と戦い続けていたようだ。——さすがに数ヶ月も経過はしていなかった。

時間の感覚が元の世界と違うので、気を抜くと数年はあっさり過ぎそうで怖い。

「サトルのお陰で一人でもなんとかやっていけるかもしれない。その時はちゃんとお別れを言うよ」

「……すまない」

出会いは最初が肝心だ。それがどういうものであっても。

話相手が居ないまま世界に打って出る事はサトルでも怖いと思う。——どれだけ様々な対策を講じられる実力があろうとも。

言葉が通じる相手というのは何物にも換え難いものだ。それを勝手な都合で捨てることなど出来はしない。

◇ ◆ ◇

頭を冷やすという意味でキーノと別れて活動する事を頭の片隅に置き、無心に彼女と散策を続けた。

時には冒険者の依頼で気分を変える。——地味な仕事も嫌がらずに。

人間に偽装しているせいか亜人や他の異形種に因縁をつけられる。——ここが人間

の国ではないことを適時思い出させてくれるのでありがたい事ではある。

人間が仕事をしてはいけぬ法律は無い。絶対数が少ないし、この手の国における人間という生き物は、大抵が食料か奴隷だ。

弱者の末路とも言える。

サトルは実力があるので他の亜人達から一目置かれていて特殊な事例だ。——そういう特殊な人間は他にも居るからこそサトルは評議国で生活する事が出来る。

中身がアンデッドモンスターなので深刻な精神負担を抑制によって解決している。それもあつてはた目からは肉体的、精神的に強靱な超人扱いを受ける。

つまり充分に目立つ存在と化していた。

宿屋に戻つてキーノの前に座ると盛大にため息を漏らすサトル。

目立ちたくないのに、と愚痴を言う彼を慰める役割を担っている。

「……おつかしいな。普通に仕事しているだけなのに」

「こういう国で普通にすること自体、人間には凄いいことなんだよ」

しみじみと言うキーノ。

彼女は見た目は人間だが種族的に吸血鬼ヴァンパイアであり、この国での待遇は割りと良い方であつた。

年齢的に若い部類で性格も傲慢な貴族風のいでたちではなく、見た目どおりの少女な

ので。

「異形種の国でもアンデッドモンスターが活動するのは難しいんだろう？」

特に骸骨系は本来、知性が無いに等しい。

特別な場合を除けば生物の天敵とも言える。その中であつてキーノは高い知能を有する種族の仲間だから受け入れられている。

少し腐ってきたら討伐対象になる可能性が高いらしい。

「これは早いところチームを作るしかないね」

「そのようだ」

サトルが仕事に出かける間、キーノは暇をもてあます。

拠点にしている宿で日頃、街で買ってきた書物を読み漁っている。

時には武器や魔法、様々な能力について学んだり、マジックアイテムの使い方を覚えていく。

仕事に関しては役に立つ機会は無いのだが、サトルがちゃんと帰ってくる内は待つている事にした。

◇ ◆ ◇

そんな生活を一ヶ月ほど続けたある日、サトルと共にモンスター退治の依頼を受けた。

近隣を荒らす知性の乏しい亜人の討伐だ。

野生の亜人は同じ亜人から敵視され、人間の国を襲うので評議国側も敵対意思が無い事を示す為、適度に間引くようにしていた。

その辺りの政治的なやりとりはキーノ達には窺い知れない――

「山間部に数十匹の亜人が根城にしている、とのことだ。人食い大鬼^ガとかだと思いが……」

「ごやとなれば逃げる」

「よっ」

元気の良いキーノの言葉を聞いて頷くサトル。

見た目は人間の男性だが、顔はずっと同じような気がする。それについて尋ねるのは無粋のような気がしたので黙っている事にした。

戦士風の姿を好むサトルだが、仕事中は魔法も使うので臨機応変に戦闘形態を変えていく。

一般的な冒険者は剣か魔法かのどちらかしか選ばない傾向にある。だからこそ、キーノの目にはサトルが輝いて見えていた。

剣と魔法を自在に操る戦士の姿が――



今回の依頼で向かう事になった山間部の奥深くで敵と遭遇する。

敵は小鬼^{ゴブリン}と人食い大鬼^{オーガ}。それと再生能力に秀でた妖巨人^{トロール}と呼ばれるモンスターだ。

近隣ではありふれたモンスター達だが数で攻められると少人数のパーティでは敗走を強いられる。

雑魚モンスターといえども数の暴力は侮れないものがある。

「……二十匹くらいか」

「二人ではきついと思うけど……。まずは遠距離から攻めるのか？」

「それぞれまばらに居るから……。回復が居ると厄介だ」

視界の悪い森の中をじっと見つめたままサトルは戦況を分析する。

彼はモンスターの位置がある程度分かる魔法か特殊^ス技術^{キル}を使ったようだ。——キー

ノはまだ勉強中なので低位の攻撃魔法しか使えない。

「無理は禁物だ、キーノ」

「うん」

彼女の言葉に満足し、頷くサトル。

聞き分けのいい女の子は嫌いではない、とでも言いだけだ。

実際、混戦が予想される中で冷静さを保っている事はとても大事だ。

どんな現場であろうとも焦りは禁物である。

「小鬼^{ゴブリン}を任せる。俺は大物を駆逐しよう」

そう言って駆け出すサトル。だが、その走法は荒々しいのにとても静かだった。

まず手近に居た人食^{オウ}大鬼^ガを蹴散らす。——弾かれた小鬼^{ゴブリン}をキーノが仕留めていく。

ただし、一気に先行せず、一チームごと確実に——

キーノの魔法詠唱に拠る音声で気づかれる事を考慮しての戦法だ。

彼女に気づいたものは顔をどうしても向けざるを得ない。そこを無音のサトルが仕留めていく。

確実に一体ずつ。無駄な攻撃をしないように。

「魔法^{マジック・アロー}の矢」

「ギヤギヤー」

あまり小声だと魔法が発動しないので仕方が無いと思いつつ、敵に狙いを定めるキーノ。

自分のダメージは小さければ自動で回復する。——これは吸血鬼^{ヴァンパイア}としての恩恵だ。それと通常の治癒魔法を受けると——アンデッドなので——ダメージになってしまう。

一撃で死なないものは小刀でトドメを刺す。

そうして十五匹を超えたところで大物の討伐に移行する。

見た目どおり——種族名の通りに——大きな身体を持つ妖巨人^{トロール}は人食^{オウ}大鬼^ガよりも

好戦的で知性が高い。だからよく配下として彼ら人食い大鬼を連れていている事が多い。

「……キーノの魔法も限界か」

「さすがに妖巨人トロール相手では……」

「……トドメをキーノにやらせたかったが……。手持ちの魔法が心許ないから……」

再生能力に優れた妖巨人トロール人は並みの冒険者では苦戦を強いられる。

斬撃や殴打に強く、魔法も単なる魔法マジック・アローの矢ではすぐに回復されてしまう。

彼ら妖巨人を倒すには弱点を突くしかない。

酸や炎のダメージを与えると再生能力が失われる。そこを狙うのが一般的だ。

——後は再生できないほど細かく切り刻むか潰しまくる。

「油を買っておけば良かったか?」

「いや……。森を燃やしては甚大な被害になる」

モンスターを倒すことも大事だが、自然を守ることも大事だ——と、サトルは思っている。

焼け野原ばかりでは生物の居ない死の世界のようになってしまう。それと薬草採取などが出来なくなるので他の冒険者や錬金術師アルケミスト達がつかりする。

——ということ様々な分野に迷惑をかける事をサトルは良しとしない。

対外的にも悪い印象を受ける行動はするべきではないと考えていた。



もし、キーノだけならば妖巨人^{トロール}討伐を中止して撤退するのが正しい。

依頼は失敗に終わるかもしれない。それでも無謀に突入して様々な弊害を生むよりはマシだと思えば御の字ということもありえる。

というよりキーノの冒険者ランクではまだ妖巨人^{トロール}討伐は無茶だ。

名声の為に命を散らすのは悪手——

不死性といえども死なないわけではない。今のキーノでは生命力を使い切って滅びる可能性があつたりする。

「周りの警備をお願いできますか、お姫様」

「了解だ、王子様」

二つ返事で応えた彼女の期待に沿うべく、サトルは妖巨人^{トロール}に突貫する。

勝てる算段があるからこそ彼は武器を振るう。

戦士ではなく魔法詠唱者^{マジック・キャスター}が本職だが——

妖巨人^{トロール}ごときに遅れを取るほどサトルは弱くない。

（下手に高い位階魔法を使うのは費用対効果としては勿体ないのだが……。依頼を頓挫させるわけにはいかないからな）

信用第一。小さな努力を怠れば大きな仕事が受注できなくなる可能性も決してゼロ

ではない。

無理して業務を遂行する義務は本来は無いのだけれど——

男だから女の子の前でかつこつきたい——。ただそれだけだ。

ご大層な理由があるわけではない。サトルは苦笑を滲ませつつ接敵していく。

(こういう気持ちは今もあるのに……。仲間にした者を大切に思う気持ちが育まないのでやはり……)

非人間的だよな、と声無き愚痴を言いつつ剣と魔法を振るう。

本職が魔法に偏っていても基礎能力がずば抜けて高いお陰でモンスターを難なく屠る事が出来た。

◇ ◆ ◇

妖^{トロール}巨人を切り刻み、肉片を叩き潰していく。

一見すると荒々しく野蛮な行為なのだが、こうでもしないと再生されてしまうので仕方が無い。

これが普通の人間パーティでも同じ事をする筈だ。

(気持ち悪い肉片を触りたくないが……。念のために移動させるか)

落ち葉などをキノノと共に集めて肉片を包んで見晴らしのいい場所に山と積む。

作業が終わった後はサトルの手持ちの油をかけて火を放つ。——もちろん周りに燃

え広がらないように気をつけて——

「妖^{トロール}巨人の始末はこれでいいとして……。まだ大物が控えているかもしれない」

「二人でここまで戦闘はきついな」

小さな身体だからか、それとも長時間の戦闘に不慣れな為か——

キーノは疲労しないはずのアンデッドなのに疲れを見せていた。——ちなみにアンデッドなのは確実だ。キーノが指輪を装備する前に散々確認したので。

「少しでもランクを上げて良い宿に泊まる為だ」

「でも、そうなると思立っんだよね？」

ランクが上がれば名声も上がる。それは至極、当然——

失念していたわけではない。

サトルは唸りつつも収入の待遇に気持ちを傾けていただけだ。

何でもかんでも楽しんで高収入できるとは思っていない。時には苦渋の選択も視野に入れる。

◇ ◆ ◇

辺りを調査し、新たな敵影が無い事を確認した後、しばしの小休止に入る。

失った魔力を回復するには戦闘行為を停止して瞑想状態に入るのが効率的だと言われているので。

今のキーノが扱える魔法は少ない。だからこそ強いモンスターをなんとか倒しても
らいたかった。その為には倒す上で大事な敵との『相性』は避けては通れない。

漠然とした感覚しか持っていない為に相手のステータスが確認出来ない状況は如何
ともしがたい。

「……キーノはどういう系統に進めばいいのかな」

「んっ？ 魔法のことか？」

静かに佇んだままキーノは問い返してきた。

「炎系、水系、雷系その他。無属性のままともいかないだろう」

「一般的なら炎と雷……正しくは火と電気の属性だそうだけど……。……酸を使えるわ
けでもないし。土属性はどうにも合わない気がする」

攻撃魔法だけではなく、探査などの補助にも特化する事が出来る。

治癒魔法は流石に想定していない。信仰系というより魔力系一択が無難だ。

「属性魔法に特化した職業だと精霊術師か……」

一系統の属性に特化した魔法を優先的に取得する事が出来る職業で、次の属性が基本
となる。

アース ウォーター ファイア エア グッド イビル
地、水、火、風、善、悪。

他にも細かい属性があるけれど——。例えば酸、混沌、恐怖、光、闇、秩序、電気

など。

エレメンタリスト

精霊術師として伸ばせる属性は基本的に一つだけ。そして、選択した属性は——他の者が取得した——同じ魔法であつても通常より強力になる。

「火の上位は溶岩。水は酸と冷気。風は電気系統。土は……なんだつたかな。こちらも溶岩があつて……植物？ ……それと宝石系だつたか」

「……宝石？」

キーノは耳に興味深い単語が聞こえてきて全身の感覚が研ぎ澄まされたようになった。

綺麗な石は大好きだ。もちろんマジックアイテムとても有用だが、とても高い。

そんな印象を受けていた。——それとは別に身を飾る装飾品としても気になっている。

女の子だから。

中身は異形種かもしれないけれど心は人間のまま。欲深い一面があるのは否定しない。

手持ちの仮面に付けている赤い宝石ももう少し綺麗なものに取り替えたいと思つていた。

「属性魔法といつても基本的な部分はどれも一緒だ。名前だけ違うものになったりする

し」

「そ、そういうものか」

「迂闊に取得して使う段階になったら、見た目が全部『魔法の矢』マジック・アローと一緒に面白くないだろうか？ ……戦略としては取ってもいいんだが……」

見た目どころか与えるダメージに大した差が無かつたりする。

弱点を突ける点では不要なものと言いつつ切れないけれど。

それと低い位階よりは高位の魔法の方が派手さと威力があるものだ。

サトルとしてはキーノに地味な魔法を覚えさせて悲しませるのは本意ではない。

「……攻撃系では火と雷が派手で目立つのは確かだ。だが、地味な物も侮れない」

「うん」

「決めるのはキーノだ。ただし」

人差し指を立てたサトルが顔を近づける。

彼の迫力に気圧される。

「自分に合わないと思つたものは選ばないほうがいい。……今の段階では試行錯誤して悩むしかないんだがな」

見た目は戦士職のサトルが魔法について色々と講義する。それをキーノは一生徒として聞き耳を立てる。

彼の役に立つ為でもあり、一人で活動する事になつてもいいように——
未熟な自分が周りの足を引っ張つては冒険者として続けるのが難しい。だからこそ
必死に覚えようと務めた。

§003 記憶操作（コントロール・アムネジア）

『サトル・スルシャーナ』という男性は従者として連れてくる『キーノ・ファスリス・インベルン』の扱いについて本格的に考えなければならぬ時期に来たと考えるようになった。

それは仲間を募ったり、依頼をこなして冒険者としての地位を強化している間中——ずつと考えていた事だ。

邪魔になつたわけではない。

自分が彼女をどの程度の重要度だと思つているのか、それを検証する為に必要になつたからだ。

自分で見つけたものを自分でどうしようが他人にどうこう言われる筋合いは無い。

そんな考えが常に自分の中で燻っていた。

サトルにとって大切なものは別にある。そしてそれは今では永遠に失われてしまつた——と思つても過言では無いくらいの喪失——

その損失を埋める程の価値ある存在は未だに見当たらないし、見つけれられていない。存在しないかもしれない。

それはそれで当然と言えるほどなので仕方が無いのだが。

それではまるで自分が酷い人間だと言わんばかりだ。

もちろん自覚している。だが、気持ちは簡単には変えられないし、異形種のアバターの影響で風化するどころか、時間経過と共に失ったものへの渴望がどんどん強くなっているような気さえする。

それはとても危険な事だと頭では分かっている。

新しい世界に気持ちを切り替えなければ全てを失ってしまうほどに。

(……だが、どうすればいい)

悶々とした鬱屈する気持ちを晴れさせる方法を。

誰か教えてくれと大声で言いたい。

けれども、ここは異世界だ。

異邦人たるサトルの気持ちを理解出来るのは同じ世界からの来訪者くらいだ。

宿屋で一人キーノの帰りを待っている間に元の姿に戻る。

白骨死体同然のクリーチャー『死の支配者』^{オーバード}が今のサトルの本当の姿だ。

肉体部分は一つたりとも存在しない。

それでも喋ったり、動いたりする事に何の抵抗も感じない。

睡眠と飲食不要。高ぶる精神は常に平常まで抑制される。

空腹を感じないのでだれかれ構わず噛み付く厄介な事態には至っていないのが救いか——

キーノであれば吸血衝動が起きるようなものだ。

(この世界にいつまで……)

元世界に戻れば窮屈な仕事が待っている。解散した仲間と再会できる保証は無い。

仮にあつても生き難い世界だ。幸せなどあるものか。

それでもやはり戻るべきなのか——

一年以上は確実に経過した。もし——現実世界の時間が止まったままならまだ——

希望ばかり夢想しても結果が最悪ならばどうしようもない。

そうであるならば少しでも明るい兆しを選ぶべきではないのか。

◇ ◆ ◇

サトルは自問自答する日々を続けていた。もちろん答えは出ない。

自分が納得するような答えは——

都合のいい解答など出るわけがないのは分かっているけれど、それを待ち望んでしま

うのは欲深い人間の心の性さがだからか。

元の世界に戻りたい、というよりは往復したい。それが出来れば何の悩みも抱かない。

（都合のいい事ばかり）

自分の事ながら呆れてしまう。

自暴自棄になりそうなのだがキーノの存在が良い抑制剤となっているお陰かもしれない。

そんな彼女を自分は大事に思えないのだから困ってしまう。

サトルは唸り続ける。

確かに精神は平坦を維持している。だから、解消されたわけではない。

燻りが残ったまま苦労は未だ消えず。

こういう時は全て投げ出してみたくなるものだ。

（……そんな事を本当に出来るわけではない）

ここまで慎重に行動し、積み上げた実績を捨てることなど――

比較的自分は物を大事にするタイプだという自負があった。

単なる貧乏性とも言うけれど。

（仲間が居なくなつて随分と経つ。だから一人で居ることには慣れている）

ゲームの後半はほぼソロ活動だ。

賑やかだった時代はもう終わった。それをいつまでも引きずっていては精神的に不健康極まりない。

そうだと分かっているながら未だに気持ちが燻っているのは異形種のアバターのせいなのか、それとも――

答えの出ない問答を繰り返すのも気持ち的には悪いかもしれない。

ある程度経ったらすっぱりと考えを切り替える訓練もしなければ。

悩みを共有する仲間が居ないというのは辛いものだと思いつつキーノの帰りを待つ。

◇ ◆ ◇

お互い飲食も睡眠も必要ないのだが野晒しの場所で野営するのも対外的に悪い気がした。特にキーノに対して。

サトルは別にどこで過ごそうと関係ないのだが、肉体のある彼女はアンデッドだとしても風呂呂に入って身支度出来る存在だ。

どういう経緯なのかは知らないが、何らかの能力の影響で不死性を得たのは事実だ。

肉体的な損傷は見ている限りでは見つからないし、本人もケガとかはしていないと言っている。――ただし、心臓は完全に停止している、と本人は言っていた。

それでも人間的に思考し、誰かの命令で動いているような気配が無いので自然発生型か、それとも自らが望んでアンデッドになった影響などが考えられる。

ゲームの仕様では該当するようなものは思い至らないけれど。

昼ごろに帰ってきたキーノは人間と同様に手を洗ったり、軽く水浴びしたりする。

飲食については味が変化したりはせず、普通に食べる事が出来ている。——本人談。

サトルの知っている文化では血カルチャーがワインばかり飲んでる。

「心臓が止まっているのに臓器はちゃんと働くんだな」

呼吸も必要としないので窒息する事が無い。ただし、口を塞がれば魔法を唱える事が出来ないのは変わらない。

発声だけはアンデッドと言えど必要不可欠な概念のようだ。

「そうだね。未消化のまま出てきたりはしないようだよ」

ただ、栄養を摂取できているのかは不明——。いや、出来ているわけがない。

成長が止まっているアンデッドなのだから。

それでも飲食するのは吸血衝動を抑制する為だ。

飢えに似た衝動ならば何かを口に行っている状況を維持していればいいのでは、と考えて今まで続けている。そのお陰かは分からないけれど、吸血に関しては今まで何も問題は起きていない。

睡眠に関しては瞑想して時間を潰す。

精神を落ち着かせていけば時間は気にならなくなる、というのは本人の談だ。

成長しないからこそ汗などはかかず、風呂に入ること本当は必要ない——、筈なので体臭に関して返り血でも浴びない限りは臭くならない、と予想している。——全てサトルの予想に過ぎないし、確認する度胸もない。

キーノに頼んで色々と実験する勇気があればもつと凄い活躍が出来る勇者になれる筈だ。それが出来ていれば——

そう考えた時、ふと疑問が天啓のごとく現われた。

遠慮する必要などどこにある。

サトルの思考に割り込む邪悪な考え——

しかし、それを否定する材料が無い。

仲間ではない。赤の他人——。更には自分が見つけて供にしただけの存在だ。

骸骨の肉体だから如何わしい事は無理だが——。これでも中身は健全な男子であると自負している。

◇ ◆ ◇

葛藤というほどのものはない。

サトルの中身はほぼ欲望が勝まさっている。

全てにおいてギルドに勝る重要事項は存在しない。

依頼の無い日は勉強か瞑想で過ごすキーノを観察するサトル。

昼間より夜間の方が活動的になれるけれど人間や亜人達の多くは昼間に活動する事が多い。そして、夜間の活動が必要になるにはまだ自分達は冒険者として未熟であった。

瞑想の日までサトルは地味な活動とキーノに様々な事柄を教えていく。——本当は教わりたい立場だが、戦闘技術はサトルの方が熟達者だったので仕方が無い。

長く共に旅をする仲間として近くに寄った程度で逃げられることはなく、わざと肩とか頭に触れても特に抗議は出なかった。——触れるといつても突き飛ばしたりする事ではない。

随分と信用されているのだな、と改めて気付くサトル。だからといって裸を見せてもらえるとは思っていない。

サトル側は骸骨なので風呂の使用に関しては色々と思うところがあり、どうしようか今も悩んでいた。

汚れを除去する便利な魔法があるので、緊急性は感じなかった。

ここ数日、気安い態度を演じてみて——あまりわざとらしく感じられない程度に——キーノとの距離を詰める。

全ては実験の検証のため——
疚しい気持ちはあるのだが卑猥な気持ちは無い。



キーノは瞑想する時、ベッドに乗って壁に背を預けて胡坐をかく。そして、目蓋を閉じたら朝まで静かになる。——呼吸を必要としないので完全に沈黙してしまう。

用件が無い限り、または声をかけるまでは微動だにしないほどだ。

評議国では頭部を晒しているキーノだが、人間の国では頭をすっぽりと覆い、仮面で顔を隠す。

それは今もって疎かにしない習慣のようなもの——

迫害の経験があるのか——または失われた記憶の中で——、それだけは徹底して守り続けていた。

そんなキーノにここしばらく差しさわりの無さそうな魔法を無詠唱でかけて様子を窺ってみた。

アンデッド特有の『完全耐性』が通用するのだろうか。

結果はちゃんと通用した。——正しくは完全耐性によって防がれた、だ。

肉体の無いアンデッドと肉体のあるアンデッドの差異は本当に肉体の有無くらい——

瞑想しているキーノの集中力はとても高く、余程強くでもない限り鼻や耳を触った程度では動じなかった。——さすがに胸とかは突付かない。

そうして適度なスキンシップの効果確かめるべく、瞑想する彼女に倣い、サトルもベッドの上に乗り壁に背中を預けて胡坐をかく。そして、キーノに両膝の上に乗るよう
に言ってみた。

両親を早くに亡くしたサトルにとっては大人の対応はよく理解していない。だが、知らないわけではない。

様々な映像記録を思い出して試してみる事にした。

父親が娘を膝に抱くように――

「え〜。……恥ずかしいな」

「俺も瞑想するから……。それとも……隣りに並ぶほうがいいか？」

無理に乗らなくてもいいか、と自分で納得した。出来れば乗ってほしい、という淡い期待を込めて。

エロゲーは一通りプレイ済みだ。――アンデッド同士だからどうしようもないけれど。

今回の目的はキーノの胸を触ろうとかは思っていない。というか未発達のままだし、もう少し巨乳であれば考えないことも無い。

◇ ◆ ◇

サトルはアンデッドだから、というのを思い出したのか意外にも――仕方ないな、と

眩きつつ——許可を出してくれた。

時間をかけて好感度とか高めた甲斐がある、とかサトルは思った。

——姿は人間の男性に偽装したままだが——早速キーノの気が変わらないうちに膝上に乗るように膝を叩いてアピールする。

日本人としては靴を脱ぐのが正しいのだが、この世界は欧米的で靴を履いたままベッドに乗るのが主流のようで、足が臭くならないものかと疑問に思うのだが、そこは色々と解決策があるらしい。

水を浴びるだけでも長く時間をかけたり、靴を念入りに洗ったり——

清潔にするところはちゃんとする。——場合によれば防臭剤で済ませることもあるとか。

汗をかかないアンデッドの肉体だからキーノは服を着たままでも体臭が臭くならないらしい。女の子の身だしなみとして風呂にはちゃんと入るようにしている。というか風呂付きの宿をせがまれたからだ。

もしサトルだけならば魔法で解決し、お金を節約するところだ。

「お邪魔します」

「どうぞ、遠慮なく」

偽装しているので実際は骨の肉体である。

キーノの柔らかい尻の感触が伝わってくるとしても股間は無反応。文字通り無いので当たり前だ。だからというわけではないが、変な反応をしなくていい。

少し座りにくそうにしながらサトルの膝上に乗るキーノ。その後、彼の胸に自身の背中を預ける。

直に肋骨が当たる不思議な感触にキーノは苦笑する。

(本当に無警戒に身体を預けるとは……)

(サトルの身体に身を預けるようになるとは……。元々が骨だから枯れ木に触っているみたい。……折れないと思うけれど……)

それぞれ似たような感情を抱き、しばし気まずさを感じる。だが、既に体勢は整った。いまさら拒否する気はどちらとも起きなかった。

相手に伝える必要は無いのでキーノは精神を落ち着かせる為に瞑想に入る。

(瞑想に入ったのかな)

と、思いつつ彼女の両肩を押さえるようにする。すると軽く頭が動いたのみで何も言いつ返ししてこなかった。

それはつまり瞑想に入った合図だ。——その後、背後から抱き締めるような無粋な真似は当然しない。

◇ ◆ ◇

無抵抗なキーノに対して失望はしない。そういう風に誘導し、餌にかかった程度の意識しか持たなかった。だからといって対抗策を説明する気にはならない。——次の機会を失う結果になるのは自明だから。

淡白な気持ちになれる——この時ばかりは——アンデッドの身体に感謝する。そうでなければ赤面もので朝まで緊張しっぱなしになっているところだ。しかも当初の予定は当然破算。

(キーノには悪いが餌食になってもらおうか)

さすがに一日で全てが済むとは思っていない。まずは軽い小手調べから。

時間はたっぷりあるし、マジックポイント M Pは彼女が想像している十倍以上保有している。

それでも得られるものは少ないと頭の中で算盤そろばんを弾くように計算していく。

言葉による誘導は意外と不得手な部分だが、卑猥にならないように気をつけつつ——

社会人として——サラリーマン時代の交渉術を思い出しながら——

「……そのままの状態で過去を思い出してみてくれ。俺と出会う少し前の事を……」

「……少し前？」

「頭の中に映像……風景だけでもいい。……または……俺と出会った時の記憶とか、無理に遡る事はしなくていい」

瞑想しつつサトルに言われるままキーノは過去を思い出そうとする。

キーノが覚えているのはサトルと出会った時から、くらいだ。それより前はおぼろげで自分の名前くらいしか分かっていなかった。

(私は何処から来たのか……。キーノという自分が生まれた場所は……)

サトルに言われなければ過去をじっくりと思いつくような事は無かったかもしれない。

嫌な事から逃げてきた自分が今更——という思いがある。だが、いずれは過去と向き合わなければならぬ時が来る。

自分という存在は自然発生したのか、それとも——

「……………」

深く集中している為にキーノが何も言わなくなった。それはそれで都合なのでサトルは準備を整える。——といっても自分に活を入れるようなものだが。

◇ ◆ ◇

この時の為に時間は作っている。宿屋の主人が邪魔にしに来る事も無い。

本当の自分ならば興奮の息遣いで目の前の少女に気味悪がれるところだ。アンデッドなので呼吸を必要としない。それゆえにとっても静かに過ごせる。

(それと心臓バクバクものに今は……ならないのはありがたい)

気持ち的にはとても緊張している。あまりに酷いと強制的に抑制される。——それ

が今は頼もしい。

それと羞恥心もあまり感じないので胸でも触らない限りは女性の身体の大部分は触れられそうだ。——服の上ならば、という条件がつく。

サトルは静かになったキーノの側頭部を挟む様に指を当てる。

少し乱れ気味のお金髪。アンデッドになってから何度手入れしても綺麗にまとまらなくなったと言っていた。

そんな髪を間近でじつくりと見る事は滅多にない事だ。

かつての仲間達が作り上げたノン・ブレイヤー・キャラクターN P Cの中に見目麗しいクリーチャーが居たら

しいが、仲間優先でほとんど見る事が無かった。それが今はとても悔やまれる。

気がついた時は自分の拠点である『ナザリック地下大墳墓』は掻き消えていた。

意識の間隙を突かれたように一瞬で世界が挿げ変わってしまった。

思えば外に出なければ良かった、と今は後悔している。——それが正しかったかどうかは判断できないけれど。

(自分も過去と向き合う時がいずれは来るんだろうな。では、そろそろ始めるか)

覚悟を決めたサトルとはある魔法を唱える。

〈コントロール・アムネシア記憶操作〉

第十位階の魔法で時間経過によってMPがどんどん減ってしまう燃費の悪さが玉に

瑕^{きず}。

相手の過去を覗き見る事が出来るのだが、これがまた厄介な仕様となっていた。常に状態をリセットされるので今日はここまで、という保存機能が備わっていない。だから、毎回同じ時間だけ過去を辿る事になる。

それを解決するには同意相手にある程度の過去を事前に用意してもらう必要がある。これが敵ならほぼ無理な話だ。

キーノに頼んだのは信頼関係を築いたお陰だ。そうでなければ——赤の他人の言葉など聞くわけがないし、自分ならば決して従わない自身がある。——つい口がすべる事はあるけれど。

「……………」

視点は相手が見たものしか映さないので分からない部分が多くなるのは致し方ない。高い位階魔法によるMP減少は蛇口を捻るように激しいものとなっている。

そう何度もかけ直せないので出来れば一回で済ませたい。

記憶の本流を辿り、キーノという少女の人生が垣間見える。既に本人が覚えていないという領域に入っている。

瞑想している彼女は多少の違和感しか感じていない。それどころか過去を覗かれて
いる感触は無い筈だ。



サトルが見た範囲では何処かの貴族令嬢だった彼女が何らかの儀式の影響で今に至る。——端的に言えばそうなる。

詳しい事は書面に書き残してからでないと何とも言えないのが正直な印象だった。生きとし生けるものは何かしら様々な秘密を抱えているものだ。それをいちいち尋ねて聞きだす事は難しい。

(……ありふれた不幸話か？ 最近のことなのか昔の事なのか……)

キーノは旅の目的を持っていない。昔の事だと割り切っているのであればサトルもどうしようもない。いや、どうにかしたいと思っっているのか、という疑問がある。

彼女が拘っていないのであればそれでいいはずだ。

愛着が湧かないのだから、それで話は仕舞いだ。

過去の探訪といっても映像の分析は得意ではないので一度や二度では理解するには至らない。しかし、時間は有限だとしても挑戦は何度でも出来る。

それとこの魔法はただ記憶を覗き見るだけに留まらない。

(向かい合わせだったなら可愛い顔を見つめていられる素敵な時間として過ごせたんだらうな)

大人しいキーノの顔をじっくりと眺める事が出来る特権を自分は持っている。そし

て、それを有効活用できない自分は世の男性陣から見れば失笑ものだ。

だが、頭では分かっているも精神の部分は実に淡泊だ。

思考はとても鮮明だが、自分の根底にある部分がクリーチャーに染まっている。またそれはそれこそが自分の本音とも言える。

所詮、キーノはゲームのキャラクターだ。

本当は違うのだが、そう思い込んでいる自分が居る。

ここが異世界だから、ということもある。

現実こんな可愛い女の子が目の前に居るシチュエーションなどあるわけがない
と――

映像を見ながら余計な雑念が入るのは如何ともしがたい。

行けるところまで廻り、今回は諦める事にする。何度も繰り返せば色々と分かることもある。

(それとは別に俺の都合を押し付ける計画も考えておかなければな)

見ず知らずの相手に気を許すなどサトルには到底出来ない事だ。そして、その精神は徹底されている。

それはそれで非人間的だと感じるのだが、淡泊なせいで改善しようがない。

こんな生活をいつまで続けるつもりだ、という別の自分が叱責してくる。そして、そ

の言葉にいずれは負ける気がする。

おそらくその時が——

§ 004 亡国の吸血姫

のんびりとした二人だけの生活の合間に『キーノ・ファスリス・インベルン』の記憶について分析を始める『サトル・スルシャーナ』という男性。

気が付いたら異世界に来てしまった異邦人の彼は先の見えない生活に不安を少しだけ感じていた。

本来ならば大慌てするところだが自身の肉体を構成するアバター偽装分身の性質のお陰で不安要素のほとんどは軽微に抑制されている。

見た目はアンドロイドモンスター『死の支配者』オーバーロードだが、心と感じ方は人間のまま。

もちろん、常日頃からモンスターとしての性質が顕現しないか、不安に思うことも多少はある。

今は見た目を人間の男性に偽装し、周りの目は騙せている。——一部の看破能力を持つ者には無意味だが。

(毎日の調査はさすがに無理か……。もう少し効率的に使えないものかね)

愚痴を言いつつキーノの記憶を覗き見ては必要な事を書き記す。彼女には魔法の効

果について説明していないし、単なる瞑想の一種としか言っていない。

それと自分の記憶力はモンスター之恩恵なのか、短期的にはずば抜けて鮮明に覚えていられる。——都合の悪い事は忘れるようにしている。それが本当に効果が現れているのかは自信が無い。

忘れた事を自覚できたら、それは忘れていないのではないかと、と。

毎回、キーノを抱き寄せている格好になるのも二人だけの時であれば平気になっているが、他人には見せられない。もちろん、恥ずかしいから。

いずれは向かい合ってキスとかいかかわしい展開に持ち込むのがサトルの知っている文化だ。カルチャー

そこは自身が白骨死体のアンデッドモンスターである為に欲望が暴発することが無いので、問題行動には発展していない。——そうでなければきつと、と思うことはある

見た目は十代ほどの小柄な少女であるキーノ。

幼いゆえに異性と触れ合う事にまだ抵抗を感じないのかもしれない。

それはそれで都合だ。

サトルは今の状況を十全に活用する。

それはそれとして無防備になっていくキーノは確かに可愛い娘だ。そう感じる心は

今もある。だが、そこまでだ。

おそらくその他大勢の女と一緒に、たまたま一緒に居るだけに過ぎない旅の道連れの人——

彼女だけが特別だ、と思うことは恐らくこれからも無い、と言えるかもしれない。

(永遠に一緒にというわけにもいかないし、これから仲間を募らなければならぬ)

だからこそ、他の仲間一人ひとりに対して同じだけ時間をかけていくのは非効率的で、面倒臭い。

他人を理解する事はとても大事だと思つてはいるのだが、心の底まで仲間として付き合う気はこれっぽっちもありません。

◇ ◆ ◇

覗き見る記憶は当人の視点のみしか映さないし、俯瞰して窺えないのが難点だ。それと見るだけで音声までは都合が付かない。

尤も——、毎回状況がリセットされる魔法の仕様によつて手間隙がかかるのも問題だった。

分かった事と言えば貴族令嬢のキーノが悪の組織に攫われ、何らかの儀式に使われたところで異常事態が発生。そこから記憶が途切れ途切れとなっているが、モンスターや冒険者に追われる事態になり、後にサトルと出会うというもの。

細かな会話まで聞いているとMPはすぐに無くなってしまふ。時間的猶予を思えば雑な情報しか得られないのは致し方ない。

(……月並みな陰謀もの。ただ、それがいつの事なのかまでは分からない)

見た目は少女だが、途方も無い年月が過ぎている事もありえる。

現に彼女は一向に成長の兆しを見せていない。——アンデッドモンスターだから。

(そういうイベントキャラと出会った俺は正しく主人公だな。しかし、ここから彼女を使つてどんなクエストをこなせばクリアとなるんだ?)

自分には帰るべき家があり、仕事がある。

元の世界の時間が止まっている事はありえないとしても——。いや、そうであれば今更戻つても惨めな生活が待っているだけでも言える。

かつての仲間と連絡を取ったところで——

(近代的な文化が無いところかも知れない。ゲームだと思えば楽だ、というのは楽観視しすぎていないだろうか)

せめてゲーム時代に仲間と作り上げた『ナザリック地下大墳墓』だけでも見つけたい。

そこには夥しい宝と様々なアイテム類が貯蔵されている。それらを手に入れるのにどれだけの苦勞をかけたことか。

いや、そういうこだわりを捨てなければ——

失ったものに固執していれば自分は先に進めない。

この世界で生きる上で取捨選択は必須——

（俺は一人だ。キーノといつまでも一緒に限らない。……供にするにはまだ多くの時間と経験が足りないだけだが）

他人の人生を自分の都合で捻じ曲げていい理由になるのか。もし自分なら嫌だと言える。

キーノ本人はいつまでも一緒に居て欲しいと願うかもしれないし、新たな恋に目覚めないとも限らない。

自分は白骨化した骸骨だ。肉体を持つキーノは肉体を持つ誰かを選ぶべきだ。

◇ ◆ ◇

一通りの情報を得た結果としてはサトルにキーノを救う理由が見当たらなかった。

拘りが無いと実に無感動だ。これでは新たな仲間を得ても愛着など皆無——

自分への失望しか得られない。

それが分かった今は新たな可能性を追求すればいい。時は無限にある。

——という前向きに気持ちを切り替えられたらいいのだが、過去の想い出を引きずる自分には簡単には出来ない難題だ。

それはそれとしてキーノの今後の扱いも考えなければならぬ。

ある程度の実力を身に付けさせて二手に別れるか、それとも使い潰す方向に進むか、だ。

(言葉としては悪いのだが……。事情を知る存在は自分にとつて邪魔であり、必要であるという……。この矛盾した気持ちはどう解決したものか……)

サトルが苦悩している間、キーノは瞑想を日課として過ごしている。

静かな暮らしは彼女にとつては日常であり、慌しい一日とは無縁であった。

近代社会の事情を知らないお陰とも言える。

「……ちよつと休み過ぎたな」

「飲食を必要としないから蓄えはまだ充分だよ」

朗らかな答えが返ってくると苦笑を覚えるサトル。

これが今の自分の日常だ。

元の世界なんて関係ない、という風に――

(……だが、俺には諦められない理由がある)

違う世界から来た異邦人だから。

元の世界に戻ろうと考えるのは自然だ。いや、自然の摂理だ。

異物を許容するほどこの世界は寛容なのか、と疑問を覚える。――もし、寛容であれば疑念が解消される。しかしそれでも、往復できない以上はいつまでも留まるべきでは

ない、気がする。

◇ ◆ ◇

記憶の探訪を終えた後、サトルは今後の展望について考え始める。

元の世界に戻るにせよ、この世界の情報を手に入れないことには始まらない。

一番の懸念というか問題点は同じ境遇のプレイヤーが見当たらない事だ。

(仮に居たとしても同じように苦悩し、寿命で死んでいる可能性がある。不死性も同様に)

現に不死性の自分が苦悩しているのだから他のプレイヤーとて同様に手段を手に入れる為に奔走する筈だ。

この世界で一生を過ごすとした決めた場合ならば手持ちのアイテムを譲ってもらっても可能かもしれない。その時、強引な方法を取れば互いに良い結果にならないのは明らかだ。

順当に味方に引き入れる事が望ましいが、説得材料が自分にはあまり無い。

結局は自分の為の願望が強い。だとすれば相手側も同じだと言えないか、と。

(宝の持ち腐れ……。戻れない状況で自らの願望を丸出しにする理由はきつと短絡的な人間くらいだ)

仲間が居ればサトルとでもう少し建設的な思考が出来たかもしれない。

プレイヤー一人として何が出来て、何をすべきかを自分ひとりで考えて答えを出さなくてはならない。

正直に言えば、頭は大して良くない。ゲーム的な思考だけが取り柄とも言える。

そんな状態で自らが望む結果を出せるとは到底思えないし、幸せな展望も浮かばない。

（開き直って何かとんでもないことでも……、と思つて高揚する感情は次から次へと抑制されるしな）

いつそキーノの裸でも拝んでみるか、と思わないでもない。

多少の性欲が刺激されるだけで不毛に終わる。いや、不毛しか残らない。

それを残ると言うのは表現としては正しいのか怪しいが——

「サトルはいつも唸つてばかりだね」

ベッドの上でいつもの儀式のように瞑想するキーノ。ここ数日は魔法を使わず、ただ膝に乗せている。

彼女の言葉で現実思考が戻る。

深い思索に耽ると周りが闇に閉ざされるようだ。

善ではなく悪に傾いたステータスだからか。良い考えに物事が動いてくれない。

背後から見るキーノの金髪を軽く撫でる。——抱き締めるよりは簡単に出来る。つ

いでに耳にも触れる。

適度に風呂に入っているせい、骸骨の手だとしても触り心地の良い髪に安堵を覚える。

女の子として身だしなみに気をつければ外に出しても恥ずかしくない存在となる。

もし、腐りかけた死体のクリーチャーならもっと早期に見捨てていたかもしれない。

吸血鬼ヴァンパイアというモンスターは数は少ないが存在は確認されている。その中でもキーノは異質だ。

元々モンスターとして存在していたわけではなく、後付だ。

一部の職業クラスは極めればモンスターそのものになったり、不死性を得たりする。それと似たような事をキーノは——この世界独自の特殊技術スキルのような『生まれながらの異能』と呼ばれるものがある——取得しているようだ。

本人に自覚が無いのは珍しいことではなく、気がついた時に生まれながらの異能トを得ている事が殆どだ。

取得条件は様々だが、意図的に得る事は出来てない。またはその方法が知られていない。

◇ そのせいか、キーノは人間でありモンスターである。

◆ ◇

サトルの知識で彼女を元の人間に戻せるかと言われれば『不明』と答える。そもそも生まれながらの異能トの知識が乏しい。

可能性の話では有り得ない事もなさそうな気配は感じている。

問題は彼女の実年齢だ。

仮に人間に戻せるとしても一気に老化して、そのまま老衰しては無駄死にさせる事と同義になってしまう。

人の尊厳を取り戻して息を引き取りたい、という願望でもあればいいが――

キーノは今のところ自殺願望を持っていない。

早く人間に戻りたい、という強い願望もない。

「朝日を浴びて消滅するような事が無ければ……、私は生きていたい」

ヴァンパイア吸血鬼は日光が弱点だ。だが、簡単に滅びるモンスターではない。

弱体化するだけだ。

日光の攻撃魔法が存在するので、そのことを危惧しているようだ。――教えたのはサトルだが。

「知性の足りないアンデッドモンスターであれば……、だが。キーノは知性を保てている。余程、状態の良い状況だったんだろう」

「このままだと腐ってくるかな？」

「年齢を経たアンデッドモンスターは強力になる、というのが通説だ。だから知識もより蓄えられる、と思う。脳みそのない骸骨系スケルトンだと怪しいかもしれないが……。それとて強力になれば知性を得る可能性がある」

アンデッドモンスターとなった後で脳味噌が腐ってくる、という仕様などは聞いた事が無い。——動死ゾンビ体系にでもならないかぎり。

ゲーム的に言えば時間経過で肉体が損傷してはプレイヤーとして行動する事が難しくなる。それもあつて首を傾げた。

もし腐るならばモンスターではなく、ただの死体でなければ納得できない。それと外部から何らかの手段を講じない限り、異形種としての特性で守られるのでは、と考えている。——サトルは自ら選択して今の姿になっている。

自然環境のアンデッドモンスターは元の世界には存在しない。これはあくまでゲームの知識での話だ。

「肉体的なペナルティが甚大であれば……。例えば知性が下がるとか。そういうのが無ければ……。この先もつと賢くなる確率が高い」

「それは楽しみだ」

賢くなるのであれば、とキノノは喜ぶ。

人間の都市で生活するのが難しい事は理解している。だから無理は言わない。

それとアンデッドモンスターになって数年は経過している筈だ。肉体的な腐敗は認められない。

サトルの知識でも徐々に肉体崩壊が——自然に——起きる設定には覚えがない。

◇ ◆ ◇

蘇生に関して実年齢が関わってくる場合は話が変わってくる。

長寿の種族であれば二百年くらいはどうもしないが人間の場合は蘇生に失敗し、そのまま灰になる可能性がある。

寿命経過が止まっていれば復活する可能性はあるけれど、それはあくまで希望的観測に過ぎない。

信仰系を嗜んでいないとはいえ復活方法を持っていないわけではない。

(キーノを復活させるメリットが俺にあるかどうか、だ)

彼女を特別視できていない以上、今の段階では半々といったところだ。

話相手としての価値はある。それと記憶を見せてもらった。

少なからずの恩は感じている。

現金な性格だと自覚しているが、つくづく嫌な野郎だなと我が事ながら辟易するサトル。

(肉体のある人間であったなら少しは前向きに努力したのかな。それとも乳首か……)

何にしても如何わしい想像ばかり浮かぶこと請け合いだ。

都合のいい魔法をたくさん持っている。それと自分は結構、如何わしい想像もできる。

今はアンデッドモンスターの特性が働いて想定よりも感情が抑制されてしまっている。至極淡白な状態になっている。

そうでなければ膝を抱えたまま黙って一日を無駄にしたりはしない。

(……でも、結局は自分の目的の為に彼女を利用する事自体は変わらない)

その内容に差異があるだけだ。

手を伸ばせば届く位置に幼女(キィ)が居る。

肉体的な成長が見込めないのが残念な所だ。

◇ ◆ ◇

真面目な男性として思考を切り替える。ここところは淡白なアンデッドモンスターに感謝だ。

キィノの問題は一先ず置いておくとして、次は何をすべきか。

冒険者の仕事をしてランクを上げるか、少し遠出を計画するか。

いや、仲間の募集が先だった。

何ごとも中途半端になりがちで困ったな、と苦笑する。

(キーノが着いてくるのを邪魔だと感じれば……、俺はとことん嫌な奴だ。……だが、アンデッドの側面としては煩わしきを感じる事があるから……。この気持ちの葛藤にどこまで抗えるかが肝だな)

人間であればキーノと共に行動する事に異を唱えたりはしない。——いや、アンデッドの側面を恐れる可能性も否定できない。

それでも適切なアイテムを渡して今に至るし、吸血鬼^{ヴァンパイア}としての側面は——今のところ——抑えられている。

亜人は想定できないから無視するとして異形はとことん淡泊だ。

同種であれば仲間意識が持てるかもしれないし、孤独を愛するかもしれない。何にしても今すぐ手放す予定ではないとしても——

(この問題を片付けなければ仲間を募っても良い結果になるとは到底思えない)

それでは駄目だ、と言う自分が居る。

昔の仲間に取りすぎている事は自覚しているが、それにしても酷い人間だ。——それが異形種としてのあり方ならば嫌悪感いっぱいだ。

自分の仲間を大切に出来ない奴はそこらのクズと変わらないじゃないか、と。サトルは仲間を大事にしたい。けれども、疑り深い性格を拭いきれない。

「……頑張つて働こう。考えても仕方がない」

声に出して自分に活を入れる。

自分は孤独を愛する孤高の戦士ではない。

多くの仲間達と楽しく冒険がしたいだけの一プレイヤーだ。——かつてはそれだけが楽しみの冒険者だった。



キーノも大事だが目的遂行も大事だ。

この世界で自分が何処まで通じるのかを——

サトルは仕事を休止し、冒険者組合にて情報収集しつつ仲間候補を探す。キーノには知識面で頑張ってもらおう事にした。

魔法詠唱者マジック・キャスターはとにかく知識が全てと言ってもいいくらいの職業クラス——。現地の知識取

集は彼女に任せておけばいいだろうと判断する。

流星に何でもかんでも自分ひとりで出来るわけではない。時間もそれ相応にかかる。分担作業は何かと便利だ。その点ではキーノの存在はともありがたいといえる。

冒険者組合にて面接を開始するのだが、パーティ構成については考えていなかった。

基本で行くか、奇を銜てらうか。

目立つ行動を自分がしなければどちらでも構わない。

「面接の応募に応じてくれた理由は何ですか？」

組合の一室を借りての面談。

数をこなすごとに意外と自分は様になっているのでは、と思えてきた。

商談と違い、失敗の多い仕事だ。成功を気にする必要が無い分、自分の気持ちで判断できるのだから気持ち的には楽だ。それとアンデッドであるがゆえのメリットとして相手が威圧しても精神的に動じない。

もし、人間種であれば大柄な人物とかに恫喝されたら逃げ出す自信がある。

本来のサトルとしての人格はそれほど大した人間ではないし、小心者に近い自信がある。少なくとも会社の上司に楯突く度胸は無い。———とかそんなことをしたら生きていけない社会だ。

「仲間になるのに理由が居るのか？」

「俺が貴方を信用して使う為です。基本的に諍いは勘弁してほしいので」

打算無くして仲間にならない。それがこの世界の規則ルールであるならばどうしようもない。

かつてのギルドは少なくとも弱者根性によって結束が硬かった。———諍いが無いとは言わないけれど。

それと同等の基準を希望するわけではないが、やはり互いに信頼しあいたいものだと思った。

全員が得体の知れない相手ならば一気に解散に追い込まれる事態も想定される。



一人二人と基準に合わない者を見送り、本日五人目の挑戦者を迎える。

運がいい事に冒険者の人口は多く、ここ『アーグランド評議国』でも数万人規模が登録されていると聞く。

それだけ人口が多い、というよりは敵が多いと見た方がいい。

最強種たる竜ドラゴンが支配する国だが、彼らは自分で行動するほど活動的ではない。——彼らの敵が現われれば話は変わると思うけれど。

長寿のクリーチャー特有ののんびりした風潮とも言える。

短命の種族は生き急ぐ傾向にあるし、不死性は基本的に内に引きこもって惰眠をむさぼる。

サトルもうっかりすれば数十年ものんびりと暮らしそうになる気持ちに何度かなりかけた。それだけ危機意識が欠如しているとも言える。

「仲間になるにはお主の信頼を勝ち取らねばならないのか」

「背中を預ける仲間とはそういうものでしょう?」

危機意識が欠如しかけているのに仲間意識はしっかりと強く残っている。

何らかの拘りだけは強く残るのが異形種の特性のひとつ、なのかもしれない。

一般的なアンデッドモンスターは何故か生者を憎んでいる。しかも多くのクリーチャーに適応されている。

単なる私怨ではない。——そういう仕様を植えつけられている、ような気がする。

「最初から信頼がありそうな人物かどうか分からないですけど」

それでも一定の基準を満たしてくれないとサトルは困る。

最初から信頼厚い人物など居るわけがない。それでも雰囲気くらいは感じ取れると信じて面談を続けている。

あえて無茶な要望を出し、相手がどのように反応するかで信用度が分かる。

中には狡猾な者も居る。それもまた想定内だ。

仲間を一番信用できない自分が判断するのだから。



かつてのギルドメンバーの半数近くはサトルが選んだ訳ではない。

自分はギルドを創設したリーダーから引き継いだ。

その人は偉大で、且つ強くて頼もしい存在だった。

流石にそういう人に自分もなれるとは思わないが、仲間から信頼される人間にはなりたくないと思った。

(スパイを警戒した挙句、新たな仲間を得る事が出来なくなったのは誰のせいだったか)

その当時はギルドランクを上げる事に皆が一生懸命になっていた華やかな時代だった。

面談だけで全てがわかるわけではない。しかし、それでも分かる事がある。

こいつは仲間の価値が無い。

そう思わせる奴ばかりが現われる現状――

種族的な特性か何かかと思うのだが、ゲーム時代よりシビアな状況にサトルは頭を悩ませていた。

正直に言えば解決方法が分からない。

今のままではキーノと二人つきり。というより彼女以外に適任が居ないという状況は望ましくない。

これは少女と二人つきりだから、という事ではない。

（パーティを組むに当たって仲間同士の信頼関係は必須だ。……俺がリーダーをやるかどうかはまた別の話しだが）

流れるにはサトルがリーダーになるのはほぼ確定と言っても良い。

最終的には別の者にやらせたい。――今の段階では自分が全てを決める立場なだけだ。

要求水準は出来るだけ下げたくない。自分が望むパーティは簡単に瓦解してほしく

ない。
いや、誰だっ
てそう思う
はずだ。

§ 005 残される者へ

冒険者の仕事そつちのけで『サトル・スルシャーナ』は面接を。

『キーノ・ファスリス・インベルン』は読書による知識の蓄積を続けた。

共に異形種であるゆえか、時間の使い方がのんびりし過ぎて日付を確認しなければあつさりと一年くらい経過しても気付かないのではと思わせる。

最初にその事に気づいたのは宿代を支払う時だった。

食事代がいくらかからないとしても一日いくらの世界だ。延々と泊まれるわけがない。

「……キーノ。やはり働いた方がいい」

サトルの提案に彼女は断る理由が無かったから——というよりは話かけてくれた事が嬉しくて頷いた。

会話がここ数日無かった。その事にキーノ自身は少し前から気付いて焦っていたところだ。

丁度いい機会が訪れた事を六大神に深く感謝する。

(……おいおい、貯蓄が減り続けている事に気付かないっておかしいだろう、俺)
 (サトルがこのまま帰ってこないと思ってたから……。ちょうど良かったのかな？
 でも……。頑張つて働くサトルの邪魔はしたくないし……)

二人共、それぞれ思うことはあつたけれど互いに話合う機会を失っていた。特に彼女はその事に敏感だった。

サトルは単に活動における不都合に気付いたのみで、彼女の気持ちは理解していない。
 い。

「君の蔵書も部屋に置いておくのは不味い。……かといって……」

宿ではなくちやんとした自宅を用意すればいいのだが——購入資金が枯渇気味だ。

これはサトルが面接で無駄に時間を浪費した事が原因だった。

キーノに働いておけよ、なんていう酷い事は当然言えない。

男として——かは自信が無かったけれど——仲間を大切に作るサトルにはそんな無責任な言葉が出せなかった。——そう。愛着など感じているわけでもないのに——

◇ ◆ ◇

資金調達を始めるにあたって冒険者の仕事をすればいい、という簡単な答えに行き着けるほど世の中は甘くない。

あれをすればこれが出来ない、という問題が往々にして存在するものだから。

世間体を気にする性格のサトルとしては昇進した手前、地味で面白くない仕事は受けたくない気持ちが強いの。だが——ここはあえて我慢する選択を取らなければ首が絞まるのは自分の方だ。

(貴族の護衛ばかり……。それと高額の依頼が……。ほとんど無い)

あるにはあるが今のサトル達には請け負えないものだ。

無理な背伸びをギルドは許さない。

規則という盾は意外と強力であった。

キーノに任せようにも彼女は満足な魔法を覚えていない。未だに妖巨人^{トロール}には歯が立たない筈だ。

実力不足の者を使い捨てにすれば名声に傷がつく。ここはさすがに譲れない。

いくら愛着が湧かないとしてもキーノは既にチームの顔となっている。それを今更変える事も捨てる事も出来ない。

——不慮の事故として処理する案も無いわけではないが——

それはそれで不審の元だ。——自分ならとことん疑う。

(……クソ。なんて邪魔な女なんだ。あの時、殺しておけば……。……なんて言うのは三流の悪党くらいだ)

聞き覚えのある文化^{カルチャー}を引き合いにしたところ苦笑が漏れた。

善人とは思わないが口汚い言葉を使うほどの悪人とも思えない。けれども——邪魔だと思おう自分が居るのは確かだ。

だが、多くの手が欲しい事もまた事実なので、キーノを失う事は結構な損失である、と思っている。

（投資した資金の事ではなく……、なんとというか……。俺は慕われるのが好きなんだろうな。……随分と安いプライドだな、おい）

高いとは思わないが、その安っぽいプライドが今はとても邪魔だった。

小心者特有の病気ではないかと——

何に対して自分は怯えているのか。実力がある事は誰もが認めているのに。

最上とは言わないけれど、少なくともキーノは認めてくれている。

たった一つの拠り所だけで人は強くなれるものだ。

これは誰の言葉だっただろうか。

こんな臭いセリフが言えるのはそう何人も居ない。

（たつちさんはもつと正論に近いし、案外……ウルベルトさんだったり……。意外な枠

としてベルリバーさんかな？ ぷにっと萌えさんは論外だ。あの人は殲滅級のバカだか

ら）

間違った方向に賢いメンバーの名前と姿が脳裏を物凄い勢いで駆け巡っていく。

間違いなく外れるメンバーが半分以上居るのは理解した。



特定しても不毛なので現実を意識を戻す。

目の前には無数の依頼が張られた木製のボードがあり、側に居るキーノがサトルを不思議そうに眺めていた。

突然、苦笑すれば気になって当たり前かもしれないけれど――

「……しばらく仕事から離れていたから……。低賃金でも受けてみようか」

街の清掃はいくらでもあり、また昇進した冒険者にとってはつまらないと判断されてしまう案件でもある。

それをあえて受ける事にキーノは文句を言わなかった。

お金が必要なのに大金を得る仕事を放棄する――その心境について一番知りたい筈ではないのか、とサトルはキーノに顔を向けつつ思った。

こういうシチュエーションの場合はどういう選択が考えられるのか、とサトルはゲーム的に思考する。

(エロゲーの選択画面でもあれば暗転するのだが……。そういう仕様は無いのか？ 出来ればあってほしいところだが……)

ここが本当のゲームの世界ならば何らかの表示が出てほしいと――本気で――願っ

た。

異空間のインベントリアイテム倉庫や魔法があるのに、どう考えたっておかしい。その筈なのに――

（見えないだけでステータス画面とか実は出ているんじゃないのか？ おかしな光るエフェクトがたくさんあるんですけど！）

と、天井に向かって声無き抗議をあげてみる。――数分待つてみたものの何も返答は無かった。

当たり前かもしれないけれど当たり前ではない事態について誰か教えてほしいと思うのは本当だ。

首の運動と称して軽く誤魔化しつつ仕事を選んでいく。

いくつかの昇進を遂げていたとはいえサトルの内心では恥ずかしさが襲っていた。見栄を気にする性格が行動を阻害する。それを今回は無理矢理に押さえ込むのだから難題極まりない。

――どうしてそんな性格になったのか――と、原因を探れば『ギルドランク』という言葉が出て来た。

一度上げたランクは下げたくない。それがプレイヤーとしてのプライドのようなもの――

なんてみみっちいプライドだ。

改めて考えてみるとそう思わざるを得ないくらいくだらない。

仲間と交わした高尚な目標であるならばまたしも、だ。

日銭にあくせくする労働者に過ぎない分際がプライドを口にする。

(一度上がった冒険者のランクは早々下がりはしない。……規則にだって一週間サボったら下げますよ、なんて書かれてはいない)

そこは何度か確認した。

余計なゲーム感覚が行動の障害となるのは勘弁願いたいものだ。しかし、染み付いたクセは中々に無くせないのももどかしい。

◇ ◆ ◇

この世界の冒険者は『総合ポイント』なる概念で競うシステムは存在しない。

それゆえに他者との小競り合いは主に私闘に限られる。——早い話が喧嘩に類する事だ。

他人を妬む事はあるかもしれないが、昇進を決めるのは冒険者組合の人達だ。そこに人となりも含まれるので単なる力自慢では最上に昇れはしない。

仮に昇れたとしても白金級プラチナ以上ともなると責任問題が付随してくる。

単に報酬が多く貰える、だけが冒険者ではない。そこがサトルにとって厄介なシステ

ムだ。——だからこそ面接を早めに行^{おこな}っている。

低いうちに仲間を集め、時間をかけて上に昇る。

最^{アダマンタイト}上からだと仲間としての親密度が低そうだから。所詮は『虎の威を借る狐』——または『烏合の衆』が関の山。

切り捨てる分には問題ない。だが、それは今のサトルの目的に合致していないという話しだ。

信頼の蓄積はとても大事だ。それが愛着を持ってない相手だとしても。

(……今は小銭でも稼いでおかなければな……)

自分に小さく活を入れつつ依頼書をボードから剥ぎ取る。

簡単な仕事は多く、頭を整理する上でしばらく請け負ってみる事にした。

亜人が住民として多く住まう『アーグランド評議国』において人間の姿に偽装しているサトルは割り合い喧嘩を売られる対象——または下等生物扱いされやすい。

この清掃の仕事も今のサトルだからこそ何の疑念も抱かれないメリットがある。

(この国は小金を稼ぐ上では過^ごし易い。名声を積み重ねてしまふと人間である事が逆にデメリットになる)

羨望は亜人や異形種なら受けるが人間では物凄く悪目立ちする。だからこそ面接に来る者は大抵サトルを軽く見ている。

——それくらい粋がった相手でないとおつさり死ぬ可能性がある。

冒険者として何かを自慢しているほうが心強い。

逆に気弱だと気になって仕方が無い。あつさり死んだ日には多くの者達から疑いの目を向けられる。

——そういう注目度は必要としていない。

「……サトルが決めたらしい」

そう言われるだろうとは思っていた。しかし、時と場合によれば全責任を負いかねない問題となる。

——キーノはそれでも文句は言わないと思うけれど、時々彼女の意見が欲しくなる。

君は俺に何をさせたい。または何を望むのか、と。

たまたまの出会いで今に至るが——彼女は元々は貴族の令嬢——お姫様だ。

類稀な魔法の才能を持ち、それに目を付けられて今に至る。——大幅にはしよつたのはいちいち回想シーンに没入するのが面倒だからだ。

それでもちゃんと聞いておかなければならない気がした。

得体の知れないアンデッドモンスターと共に居て本当にいいのか、と。

◇ ◆ ◇

モヤモヤとした思考に耽ったところで決断力が凡人以下の自分には話かける事が意

外と難しかった。

別にココミュニケーションが出来ないわけ ミュ障碍ではない。

女の子とお話するのが苦手なところがあるだけだ。

肉体があれば顔を赤くしたり、肌が触れただけで叫びだす厄介な冴えない主人公なのだが——アンデッドモンスター之恩恵で精神的に取り乱す事が少なく済んでいる。

気持ち的には色々と一般の人間と大差が無い筈だが。

——実はこっそりキーノの胸に手を置いた事がある。

幼い身体ゆえに平坦で掴みどころが——

即座に精神が沈静化し、しばらく呆然となつてしまった。だが、同じくアンデッドである筈のキーノは女性としての恥じらいが無いのか——種族の特性のお陰か——全く気付いていない——気配や素振すらも感じなかった。

サトルの知る文化はカルチャーこの世界——というかアンデッドにはビクともしないようだ。鉄よりも尚硬い『七色鉞』で出来ているんじゃないのかとさえ思う。

(自分という存在が人間であるのか、アンデッドモンスターであるのかの確認だったが……。意識は人間なのに精神がアンデッドになつたり人間になつたりと忙しい。……それが本来は正しいあり方なのかな)

知識にある創作物とはまるで違う。

創作者が実際の生物に詳しくなく、単なる想像で作り上げているせいもある。

本物のモンスターは実際にはこういう存在だ、と知れば文化に革新的な変化が起きる筈だ。^{カルチャー}

それを地球に届けられないのが残念であり、余計な争いの種が広まるかもしれないが、あんな世界が混乱する程度は毛ほどにも気にならない。むしろ、より楽しい世界になるかもしれない。

——出来れば自分の能力の恩恵も持ち帰れたらいいのだが——そこまで都合は良くない筈だ。

(思考の脱線もまた……アンデッドの特性なのかな)

軽く溜息をつきつつ剥ぎ取った依頼書を受付に持つていく。

目下の目的は日銭を稼ぐこと。だが、野望は大きいに越した事はない。

◇ ◆ ◇

後ろからサトルを眺めていたキーノは彼が色々と悩んでいる事には気付いていたが、声をかける材料が無かった。

アンデッドモンスターだし、一日中起きている生活は精神的にきついかな、と思っていた。だが、勉強と瞑想で時間が潰せている。むしろ覚える事が多くて四苦八苦していた。

(魔力系はまだ第二位階に届く程度だけど……。その魔力系についてのサトルは書物以上の知識を持っているところが凄い)

どうやって覚えるか以外の知識では雲上の存在であった。

細かい特殊^ス能力^ルの事にも造詣が深い。——時々、彼の本気はどの程度なのか知りたくなってしまう。

もちろん、異常な能力を見せると周りが騒ぎ出す。

サトルは大騒ぎするような事態を好まない性格のようだから無理は言わないけれど——一度は拝んでみたいと思うのは魔力系魔法^{マジック・キャスター}詠唱者だからか。

(……サトルはきつと優しい人だ。英雄というものは目立つ存在だけれど、孤独でもある。誰からも尊敬され、けれども……誰からも助けてもらえない)

世に知られている英雄譚の主人公の最期はどれも悲惨なものが多い。

悲劇作家が多いせいもあるし、喜劇はなかなか民衆受けしない。

キーノも勉強の合間に読んではいけるけれど、名声を得る多くの者達の最期は孤独との戦いだ。

死んだら受け継ぐ者達で争い始める。

サトルの場合は簡単に死なないと思うけれど、遙か先を見据えているのは理解した。

富と権力を得た後、争いによって全てを失っては困る。

そんな事を考えていたら受付からサトルが戻ってきた。

「今日一日……と言いたい所だが……、世知辛い世の中は何処でも一緒のようだ」

人間の姿に偽装している彼は表情豊かに苦笑していた。

無理して宿に泊まる必要は無いとしても仕事に対して律儀な一面は嫌いではなかった。

そんな彼の力になれるのであれば——身体がバラバラなるようなものでもないかぎり——協力したいと思っている。

(……そんな彼とて自分の目的の為に動いている筈だ。いつか……きっと別れる時が……。……その時は……考えたくないな)

一生供として生活するのか、出来るのかは分からない。

甘えられる今が——たぶん——一番幸せではないのか、と。キーノは痛みを感じない筈の胸にチクリと針が刺さった。

精神的に強靱だと言われているが、それはあくまで一般論に過ぎない。

心はまだ幼い少女である——

◇ ◆ ◇

惰性のように依頼を受け、一日から一ヶ月と時間が過ぎていく。

それ自体は他の冒険者や住民も同じ——

キーノも焦りを覚えるような気持ちには湧かない。

——ただ、サトルだけは現状を打破しようと色々と考えているようだった。

(資金調達は順調だが……。他に金を稼ぐ手段は無いものか……。商人か貴族にでもなるしかないのか？ 農民とか経験は無いし、手続きが面倒なものちよつと勘弁願いたい)

ゲームであればモンスターを倒したり、アイテムの売買で生計はいかようにも出来た。

だが、ここでは現実的な問題として様々な手続きが障害となつている。

売るものはあるにはある。それとて無くなればまた苦悩の毎日が訪れる。

それには自分ひとりでは駄目だ、という結論にすぐ至る。

(経済の事は音改ねあらたさんが居れば任せられるのに……)

必要な人材が居ない以上、自分ですべて考えるしかない。だからこそ仲間がどうして必要になる。

そういう堂々巡りの思考が行動を狭めていく。

面接はどうしても必要だ。自分の要求水準は落とせない。

金も必要だ。——薄っぺらい自尊心の為に。

(……俺が我慢すればもつと選択の幅が広がる気がするけれど……。それが出来れば苦

労はしない)

一歩前に進む決断力が自分にはまだ足りなかった。

キーノに顔を向ける。

何かを期待している雰囲気醸し出している。何を聞いてもサトルが決めれば、
としか言わない。

いや、そう思い込んでいるだけで彼女の気持ちをまともに聞いたためしがあっただろうか、と。

聞けるのか、と尋ねてくる自分が居る。——小さな女の子に声をかける度胸があるのか、と。

あるから一緒に連れ歩いているのではないのか。そうでなければ——
なんだというのだ。

自分は人間ではなくアンデッドモンスター『^{オーバー}死の支配者^{ロード}』だ。大抵の精神的な攻撃は無効化出来る。——自分の小さな葛藤すらも。

それを何故、十全に活用しない、と激を入れるもう一人の自分——

(乳首くらい平気だろう、鈴木悟^{すずきさとる}っ！ 相手は単なる幼女っ！ 妹みたいなものだ。

……俺、一人っ子だけ……)

小さな子供に話かけるのは大人としては別に出来なくはない。

周りからの視線は人間の男であれば痛いと感じる程度——アンデッドの身体でも痛いと思ってしまうけれど。

それを『幻肢痛』として処理してしまえばいいだけだ。

たかが女の子の一人や二人——

そう強く思いつつキーノの頭に手を置く。

「？」

突然の行動に小首を傾げるキーノ。それと言葉が続かない大人の男性——人間に偽装しているサトル。

——中身は人間なので偽装しなければならぬ事態がおかしい——

子供の頭を撫でるくらい平気だと思ってしまったが、実際はそう簡単に他人の頭に手を乗せるなどんでもない行動ではないのか、と思った。しかも他人だ。上司の頭に手を乗せる奴は見たことがない。

だいたい意味があるのは誉める時くらいであつて挨拶で頭を撫でるとは何事だ。完全に子供扱いしているじゃないか、と。

もし、自分の妹であれば他人からそんな事をされたら激高する自信がある。勝手に触るんじゃないよ、殺すぞ、と。

(……なんだ……。俺、愛着が湧かない、とか思っておきながらキーノを大事にしてる

じゃん。正確には大事に思っている、か……。吊橋効果も妙な力を持つものだな

そういう現象を研究する者を深く尊敬する。

軽く息を吐きつつ——折角なので——キーノの頭を撫でる。深い意味は無いけれど

「……こんな俺について来てくれてありがとう」

「!? ……うへえ……、急に言われると……恥ずかしいな」

照れつつ仮面で顔を隠すキーノ。

異形種の国なのだから別に可愛い顔は隠さなくてもいいのに、とサトルは思ったが言葉には出さなかった。

(……うわあ。なんか相当恋愛フラグが溜まってません!? 思ってたのと違うような……)

サトルとしてはもつと子供らしい無邪気な反応を予想していた。それが顔を赤らめるところまで来てしまった、と予想外の事に驚く。

大人っぽい反応に思わず言葉に詰まるサトル。——もちろん精神が即座に抑制される。

小さな身体だからといって甘く見ていたのかもしれない。

年齢で言えばキーノも既に立派な成人女性と大差がない、筈だ。老化しないから実年

齡が分かりにくい。

アンデッド化によって時が止まっているのは肉体年齢だけであり、内面は今も成長中——たぶん。

◇ ◆ ◇

そうしてサトルとキーノの二人の生活が未永く続きましたとき、めでたしめでたし。穏やかな日常が続けばありえなくはないグッドエンディング。——しかし、ゲームとは違い、画面が暗転する事無く日常は決して幻にならない。

金貨を数十枚ほど稼いだところでサトルは変化しない景色に——擬似的に——溜息をつく。

この世界に来て結構な日数が過ぎた。それなのにゲーム会社からも仲間からの連絡も一切無い。

(元より『伝言』^{メッセージ}は今もノイズしか伝えてこない。……これは接続が切れている時に起きる現象だが、誰かに繋がったりしないものか……)

試しに召喚魔法によって呼び出したモンスターに接続を試みると鮮明に伝言^{メッセージ}が機能した。だから不具合はありえない。

魔法の機能は今も健在である。それが分かかってしまうと寂しさが襲ってくる。

この世界に仲間が居ない、という事実を受け入れなければならない事に。

元の世界である日本に大した愛着は湧かない。けれど、それでも自分の育った環境をすぐに忘れられるわけがない。

朝四時に起きて会社に行かなければならないのだから。——とつくに解雇か搜索願を出されているか——後者はあまり期待していかないけれど——
(帰り道を塞がれた俺はこの世界でどう生きるべきか。……無駄を承知で仲間を探す旅に出るのもありだが……)

その前にこの世界に居るプレイヤーが自分ひとりなのか、という疑問がある。

少なくとも数百万人規模のプレイヤーが居た。その中のごく少数でも居てくれれば互いに情報交換のやり取りが出来る。

問題があるとすれば自分には敵対者が多かった事だ。

サトルのギルドはそれなりに悪党として有名だった。そういうプレイスタイルで臨んだから仕方が無い。

(ゲーム内のいざこざをこっちの世界まで持ち越す幼稚さはさすがに無いと願いたいものだ)

悪のギルドといっても誰とも同盟関係を結ばなかったわけではない。

時に敵対し、時に手を取り合うこともあった。

願わくば同盟関係にあった関係者と接触したい。

(そんなピンポイントな人材が都合よく見つかるとは思えないけど……)

仮に居たとしても元の世界に戻る手段は持っていない。

であれば何が出来るのか——

それはその時、色々話し合うしかない。

空論ばかりでは不健康なのでこの世界に来て気づいた事などを書物にまとめようと思つた。

恨み言ばかりになりそうだが——

いざという時が来ないとも限らない。——せめてキーノが寂しくないように。

(俺が彼女にあげられるものなど大して無いのだから。……それと……突如として元の

世界に戻されたら……、きつと泣くよな。吸血鬼だから泣かない、とか言われそうだが

ヴァンパイア

……。精神面は今も人間のままの筈だから……)

自分だったら確実に路頭に迷う。または泣いたり、叫んだり——とにかく、当り散らす事は確実だ。——すぐに高ぶる感情は抑制されてしまうけれど——

受けた恩に対してきちんと返すのがサトルの流儀だ。それはたとえ敵対者であつても。

特別企画 ギルガメツシユ出張版

† 0 0 0 水魔法

サトル・スルシャーナと共に旅を始めてしばらく後、手持無沙汰だったキーノ・ファスリス・インベルンは魔法の向上を目指したいと進言した。

元々才能はあった。素質についてはよく分からないが、人並みではないかと。

まだまだ成長途中の能力故、正しく使いたいしサトルの役に立ちたい気持ちがあった。

「特定の魔法を覚えるにはどうすればいいの？」

「んっ？ んー……。それは運……。次第かな……。」

魔法の事は何でも知っているサトルでも答えられない事がある。それが何なのかは正確には分からない。けれども秘密にしなければならぬ重要な事というわけでもないように安心した。

サトルは何も覚えていないキーノを旅の伴侶に向かえ、様々な事を教えてくれる。彼が不死者であることは勿論、自分も同じく不死者であることは理解した。

どうしてそうなったのか、キーノ自身には覚えが無い。けれどもある日突然全てが変わった事だけは理解できる。

何しろ脳機能が死んでいるのが普通の不死者だから。

「手ごころな……宿を取って……。あまり人気のない場所で話すのでしょうか」

神秘は常に隠匿されなければならない。

これはあくまで風潮であって絶対ではない。サトルは雰囲気づくりの為にそうするのだと後で教えてくれた。

何事も雰囲気は大事である、と。

身体に覚え込ませるうえで効率を上げるには様々な方法がある。特別な食べ物や薬はもちろんのこと、時間や心身の精神状態も。

儀式魔法というものがある。これは大勢が一つの魔法を行使する際に互いの信頼関係が大事だと言われている。

実際の儀式魔法は効率を上げるために洗脳する場合があるとか。それはそれで一つの方法らしい。

◇ ◆ ◇

小都市の宿に落ち着いてから周りに遮蔽物のない場所に移動する。

これは単に迷惑をかけないため。呪術的な意味合いは無い。

「まず君が取得している職業クラスを知らなければならぬ。戦士が極大魔法を扱えないように。魔法も才能以前に適切な職業クラスを必要とする」

「はっ」

簡素な岩を椅子に見立て、キーノとサトルは向かい合う。

教師役はサトル。

普段の彼は街中では偽装用に戦士風の全身鎧フルプレートをまとっているが今は魔法詠唱者マジック・キャスターとしての豪華な姿だ。

死の大魔法エルダーリッチ使いより強そうな白骨骸骨。種族名は聞いていないが魔法を扱う不死者アンデッドの中では最高峰だと本人が言っていた。

対するキーノはボロボロの黒い衣服だが魔法的な加護が込められた由緒正しいマジックアイテムである。

普段は恥ずかしさの為にフードで隠す金色の髪の毛は今は自由に風に晒している。

不死者アンデッドになって伸びなくなった髪だが、腰にかかるほどの長さがある。

元々色白だった肌はより白く、けれども汚らしく腐敗はしていない。

発汗しなくなったとはいえ風呂は好きだ。

吸血鬼種になっていろいろらしいが瞳は赤い。これは元々からなのか不死者アンデッドになってから変質したのかは不明。

——元々の色が関係しているのかもしれない。臙気おぼろげだが不死者アンデッドになる前は人間種であつたはずだ、とキーノは時々だが思い出す事がある。

「俺は知識は教えられるが人に使わせる事までは出来ない。期待されても無理な事があるからな」

「はい」

元氣よく返事をするキーノ。

見た目は幼い女の子。しかし、不死者アンデッドとなつて随分と経つ。おそらく数十年近くは経過しているのではないかと。

不死者アンデッドは歳を取らない。実年齢が意味をなさない種族だ。

老化はしないがデメリットもある。

「俺は魔力系の約半分の魔法を習得している。全ての魔法が実益であるわけではない。中には危険なものも含まれている。キーノには実戦より知識を深めてもらいたい」

見た目が邪悪な不死者アンデッドにも拘わらず、サトルは——キーノの知る限り——優しい。それは性格的なものか、それとも打算からなのかは分からない。

物腰トラブルが丁寧で威圧感が無い。

騒動トラブルを嫌っている事は知っている。それでも感じる優しさは演技ではない気がした。



まずサトルは実際に魔法を唱えてキーノに披露する。

言葉より視覚から理解を早めようと思った。

高い位階魔法は辺りを焦土と化し、騒ぎを聞きつけられると面倒だから。そういう理由で低い位階から始めた。

キーノにとっては低くても様々な魔法を扱う彼に羨望の眼差しを向ける。

魔法を覚えたくても覚えられない人間はたくさん知っている。それらを優に超えた能力を持つサトルはまさに偉大な魔法詠唱者だ。マジック・キヤスター

それが無名なのだから信じられない。——キーノはそこまで世間に精通しているわけではないので有名度は理解できていないけれど。

「見せたからとてすぐに『魔法の矢』マジック・アローが使えるわけではない。だが、何らかの条件が合えば意外と早く使えてもおかしくはない」

そもそも魔法とは何か。それはサトル自身にも説明できないもの。

出来ないというか——

(……ステータス画面に載っているから、なんて言えないよな)

キーノには窺い知れない事実がある。

サトルはそもそもこの世界の住人ではない。

(でも、この世界の人間達は実際に魔法を扱っているわけだし。俺にはそっちの方が凄

いと思う。しかもステータス画面無しで。どうやって取得してるんだか……。それと経験値の振り分け。これが出来ないとか能力値を増やすことも難しい筈なんだけども)

軽く唸りつつ現実に意識を向ける。

仕様だの才能の違いはあれど発現する力はどちらも同じ。厳密には違うのかもしれないが大体のところでは一緒である。

「堅苦しい説明はやめて。いくつか戦闘以外の魔法を見せるとしよう」

「戦う以外と言えば治癒？ それとも転移？」

「いやいや。日常生活にちよつとしたサプライズ……。心の拠り所というか……。あると便利だな、という……」

(ぶっちゃけ『微妙系』って奴だ。これ実装した奴の精神を疑うわ、みたいなのもあるし) ゲームにおいて戦闘以外といえばアイテム制作やプレイが便利になるような補助的なものが浮かぶ。しかし、それ以外にも用途として存在する。

利用方法は千差万別。戦闘特価から見れば無価値にも思えるものも少なからずあるものだ。

(手当たり次第に習得した結果。俺にもなんでこれ取ったのか忘れてるものもあるけどな。一回しか使わないようなニツチな魔法とか)

コンプリート。それはプレイヤーであれば誰もが憧れる単語だ。

「特にサトルはやり込み系のプレイヤーだ。無意味だと分かっている手を出さずにはいられない。」

「では、見せてやろう。魔法の奥義おくぎを」

両手を広げるように掲げるとキーノが拍手して喜んだ。期待に胸を躍らせる子供のよう。

彼女の無垢なる笑顔は不死者アンデッドとなつているサトルにとつても心温まる気持ちにさせる。

生者憎しが通説の不死者アンデッドモンスターといえど中身は人間の心を持つ優しい青年を自称している。

「ホット・スプリング温泉」

開けた場所に突如として間欠泉が吹きがあり、それが治まるころには円形の温泉が出来る上がった。

この魔法は——一応——攻撃魔法に属するが温泉を楽しむことも勿論出来る。出始めはかなりの高温なので適度に冷やす必要がある。

周りへの被害を出す魔法とは言え、攻撃の用途としては疑問を覚える。あと、温水が噴き出るので火を消す効果がある。

（いちいち噴き出るから温泉づくりに役立つかは微妙なんだよな。しかも攻撃魔法だ

し、これ。……確か火傷じゃなくて殴打ダメージを与えるんだったか？)

単独で遊ぶ分には役立つがゲームの中ではあまり意味のない部類ともいえる。しかし、この世界においては意外と役立つ。

ここは現実世界で、住人が居る。

「水源が無いのに水が噴き出た」

「そう。これが魔法の力だ。どういう原理なのか俺にも分からないが……」

魔法は不可能を可能にする。時には物理法則すら無視して——

理屈はおそらく誰にも説明できない。しかし、確かにこういう魔法がありますよ、とは言える。

普通の人間の感性から言えば理解不能だ。

水源が無いので埋めてしまえば処理できる。後々また噴き出るような事は無い。

本物の温泉ならば土で埋めた程度で収まるわけがない。

◇ ◆ ◇

せつかく出た水たまりは時間と共に冷えていく。そして、消えていく。

それを温めたい時はどうするのか。焚火で炙ったり焼いた石を投入する。

原始的な手法もいいが、ここはやはり魔法の力を使いたい。

「そんな時に便利な魔法がありません」

(まるで通販番組だ)

サトルは不死者アンデッドなので火が弱点だが、温かい水が駄目ということはない。

対策を取っていれば短時間に限り、溶岩の中に手も入れられる。これはステータスの恩恵があるからこそ出来る芸当だ。普通なら火傷どころか手首が溶け落ちる。

いわゆるダメージ覚悟というもの。

「まだ温かいと思いますが……。冷たくなった、という想定で……」

「はい」

「温度変化」
アンパラチャー・チェンジ

術者の意思によって温度を高めたり、冷やしたりする魔法だ。温度の高さは術者レベルによって変化する。

サトルの場合は一気に沸騰させたり、一瞬で凍結まで下げる事も可能だ。

(凍結させなければ水魔法を使えばいいし。何の用途を目的としていたのか)

取得している職業クラスによって習得できる魔法が違うと言われている。その関係で仕方なく、この魔法しか使えない場合があるのかな、と。

それにしては使いどころが限定される魔法だなと呆れてしまう。

(水を温めたいだけなら『水加熱』ヒートウォーマーもあるけれど、広範囲でならこちらの魔法が適任か……)

サトルが提示したもう一つの魔法は水筒の水を沸騰させたり、保温に適した小規模用途のものだ。

追加で水を足すと効果が失われる。

「水が足りない」と思ったら……〈水 創造〉。要らないと思つたら……

〈水 破 壊〉

信仰系に属する魔法もマジックアイテムの力で——一日に扱える回数が限られているが——行使することができる。

本来は豊富な魔法を扱いたいが出来ない事も多くある。それは戦闘用に調整した職業構成が大きいかかわっていた。

キーノが現在取得していると思われる職業クラスの一つ『賢者』セージであれば魔力系、信仰系の初期魔法なら今見せた程度は——全部は無理だが将来的には——扱える。

問題はどうか取得させるか、だ。

(もつと派手な魔法も使えるけれど、今の段階だと水芸と変わらないな)

サトルが気軽に行使している魔法もキーノにとつては未知のものだ。一部は知っているかもしれないが、多彩な魔法を行使できる魔法詠唱者マジック・キャスターはそう多くない。しかもまだ隠し持っていると思えば赤い瞳はより強く輝くことだろう。

ただ見せるだけでは自慢でしかないので一つ一つ説明していく。

覚えているだけで詳細までは関知していない、という事は無い。

しかし、それでも必要最低限の情報くらいしか伝えられないのは実にもどかしいとサトルは思った。

うっかり用途不明の魔法を取得してしまつたら、という危惧はある。そのことについては運が悪かつたと思つて諦めてもらうしかない。

†001 〈幕間〉 とある不死者の独白

キーノは生まれつき不死者アンデッドではない。当たり前かもしれないが、世の中には最初からそういうものとして生まれたモンスターが存在する。

死者になんらかの作用が働き動き出す。その原理は未だ解明されていない。けれども確かに実在する。

生者が死んで死者として動き出す。一見、蘇生に近いがそうではない。

大抵は知性の乏しい骸骨スケルトンや動死体ゾンビと成り果てる。キーノも最初は知性の乏しい動死体ゾンビだった。しかし、どういいうわけか様々な知識を得て日常会話が可能なほど今は生者と遜色ないまでに至った。いや、至れた。

知性を得た不死者アンデッドも生者と同じく戦士か魔法に特化した強さを得ていく。違いは治癒魔法の効き具合だろうか。

「キーノを生者として復活させるには信仰系の魔法が必要だ。しかし、俺は魔力系……。その中でも死霊術を極めている。寧ろ使役する術すべの方が得意だ」

魔法で生み出した黒板に様々な魔法名を記しつつ教師役の不死者アンデッド『サトル・スル

「シャーナ」は言った。

生徒役たる金髪赤目の『キーノ・ファスリス・インベルン』は真面目に教えられた言葉
葉を紙に記す。

知識は力である、と。

「基本的に不死者^{アンデッド}となつた瞬間に肉体的な成長は止まる。寿命も同様に。二〇〇年経とうが関係ない。しかし、生者として寿命を迎えてしまえば基本的にどんな蘇生魔法も通用しなくなる」

魔力系のみならず信仰系の知識も持つサトル。

彼が話しているのは世に知られていない高度な位階魔法の詳細だ。

キーノの知識では第五位階より上は未知の塊。それが真実かは置いておくとしても

サトルは本当に多彩な魔法を披露する。だからこそ説明にも嘘は感じられなかった。

「竜^{ドラゴンロード}王^{ワイルド・マジック}達が扱う『始原の魔法』はその名の通り、彼らのオリジンスペル……。俺達の扱う魔法とは一線を画す。おそらく、竜^{ドラゴン}種特有の擬似魔法に分類されるものだ」

「ギジ魔法は一般には扱えないってこと？」

「そうだな。さすがにクリーチャー特有の能力まで扱うことは無理だ。しかし、何らかの方法で竜^{ドラゴンロード}王になれば……。可能性はあるかもしれない。無理して取得しようとする

と、多くのものを犠牲にしそうだが……」

苦笑しながらサトルは言った。

彼は不可能な事だとは思っていない。しかし、出来たとしても代償が必要だとも言った。

確かに魔法の一部はデメリットと呼ばれる代償が必要となる。キーノもそれは疑われない。

楽しんで得られる能力など無いと信じている。

「聞いた話では……。彼らは位階魔法電王を扱えないらしい。そもそも始原ワイルド・マジックの魔法こそ彼らが世界の長たる証だと自負していた。それが一般に広まった位階魔法のせいで立場が脅かされた……。話としてはそんなものだろう」

そして、自分達の地位を守りたいがために位階魔法を滅ぼそうとしている。いや、それを行使する全ての生き物を。

全滅されると命令する楽しみが無いから部下として側に置くことは許している。しかし、実際のところはサトルの想像でしかない。

◇ ◆ ◇

この世界には何体かの竜ドラゴンロード王が存在し、各地に住処すみかを作ってその地域を支配下に置いていく。

北方は何体かの竜^{ドラゴンロード} 王達が結託し、国として治めているが——
 その他の竜^{ドラゴンロード} 王は基本的に暴力による支配だ。

サトルの集めた情報には自らの進化の為に多くの生命を犠牲にしている者が居るとか。その中にはキーノの故郷も含まれていたのかもしれない。

国を丸ごと滅ぼせる竜^{ドラゴンロード} 王の力はサトルから見ても脅威であり、敵として認定するに値する。

少なくとも彼は現地の住人と仲良くなりたい気持ちがある。力を得るためとはいえ国まで滅ぼそうだななどと大それた野望は持ち合わせていない。なにより、何も残らない事が許せない。

「味方がキーノ一人では心許ない。だから、俺も無茶なことほしくないよ」

「たくさんの魔法を持つサトルでもやつぱり竜^{ドラゴン} 王は強敵？」

「竜は最強の種族だ。俺の知識の中でもそうなっている。だが、倒せないわけではない、
 が……。一人で全滅まで出来るかと言えば……。そこまで傲慢ではないよ」

場合によっては数万体の竜^{ドラゴン}を屠れるかもしれないけれど、それでもやはり未知の能力を持つ相手に無謀に挑むほど勇敢ではない。

今のサトルが苦も無く倒せそうな竜^{ドラゴン}は老年くらいまで。

長老クラスからはさすがに足踏みする。それと数だ。

一体だけならなんとか古^{エインシャント} 老か若い竜^{ドラゴンロード} 王^{ドラゴンロード}くらいは相手に出来るという程度。

(そもそも竜^{ドラゴン} 王は種族名ではなく称号らしいけどな)

「竜の話しは置いて……。キーノは蘇生を望むか？ 不死者のまま生活が続けるか？」

「……その辺りは良く分からない。不死者なら長くサトルと旅ができるし……」

悠久の時間を使う場合は確かに不死者は有益だ。しかし、弱点もある。

いや、弱点のない種族は居ないか、とサトルは独り言ちた。

魔導を極めようとするなら不死者がいい、というのは世の常識だ。確かにそれはその

通りなのだが――

子孫繁栄を望むのであれば生者。疚^{やま}しい心も持っているサトルとしてはこちらも捨

てがたい問題である。

中身はバリバリの生者である。働き盛りの青年――社会人だ。

好きな女の子と付き合いたい気持ちくらいある。いや、あった。

不死者の身体が大部分の性欲を抑制しているせいで、あまり興奮しなくなつて久し

い。

気持ち的にも高揚しないと平坦な気持ちに囚われて何にも興味を持てなくなる気がする。

だからこそ、というわけではないと思うが側に誰かが居た方が便利だと思っている。



蘇生に関して方法はあるが実践にまでは至らない。至れないが正確だが——
今のところ出来ないわけじゃない。

キーノが望めば——おそらく希望を叶えられる。だが、それは同時に別離を意味する。

彼女が蘇生できてもサトルは出来ない。最初から不死者だから。いや——そもそも、それですらないわけだが。

(共に歩むなら今の方がいい。……しかし、俺の願いを押し付けるわけにもいかない)
死人を見つける度に蘇生して回る——正義の味方——ような生き方が好きなプレイヤーには心当たりがある。けれども闇雲な救済は後々何かと響いてくるものだ。特に悪人はしつこいのが通説だ。そういうのはさっさと殺すに限る。

「前回、微妙な魔法ばかりで困惑しただろう。ああいうのは無理して覚えなくていいが……。実戦向きをいくつか改めて見せておこう」

「水の魔法でも凄いなと思ったよ」

「ありがとう。……だが、あれは専門の職業クラスならもつと凄い効果が表れる。俺のは単なる猿真似のようなものだ」

どんな魔法も適正職業クラスというものがある。サトルの場合は死霊術だ。それ以外は威

力が何割か落ちてしまう。

そういう補正があるからこそ誰もが上を目指せるし、切磋琢磨出来る。

(そもそも自分で全部の魔法を使おうとすればそれだけアイテムやM^{マジックポイント} Pを失ってしまう。仲間にやってもらう方が戦闘の効率は上がるものだ)

単独での実力は中くらいだと自認しているサトルも仲間の必要性は理解している。

だからこそ新たな仲間を選定中である。しかし、それとて条件を満たさなければ受け入れたくない気持ちがある。

自分の背中を預けるに足るものはそこらのごろつきでは困るので。

「キーノが初期に持っている職業は……、^{ソーサラー}妖術師だったか」

魔法適正があれば必然的に取得できる初期職業というものがある。

いきなり希少な職業は課金でもない限り取得できない。まして、この世界では特に――

一般的に知られているのは『^{ウィザード}魔術師』、『^{ソーサラー}妖術師』、『^{アーケイナ}秘術師』、『^{クレリック}聖職者』、『^{プリースト}神官』などだ。

これらは下位職業^{クラス}だ。レベルを上げて、特定の条件を満たす事により中位、上位へと至る。

条件を満たせば無理にレベルを上げなくてもよい、ということもある。もちろん、そ

のシステムのなものを理解している必要がある。

個々人が取得している職業クラスを特定するには特別なマジックアイテムが必要だ。それらは大抵冒険者ギルドや魔術師ギルドにある。

一般的には情報の偽装は出来ない。しかし、サトルは——術者レベルが高いゆえに——偽装する方法を持ち得ているので騙すことが出来る。

この世界特有のマジックアイテムの存在はサトルも認知しているが、どういう方法で製作されているのか、詳しくは知りえていない。

一説には数百年の前に実在したという神だか英雄だかが広めたものと古代の遺跡から発掘されたものがある。

「……そうらしいね。それだと何か不都合があるの？」

「いいや。最初にしては恵まれているというか……。基本的にどの職業クラスもメリット、デメリットがあるもので何が悪いとは言えない」

サトルは例によって魔法によって黒板を出す。現地にも存在する『生活系』に類する魔法らしいが彼はこの系統についての知識は持っていない。

第零位階だと言われていたので、それだとばかり思っていたがそういうわけではなかったことが後で判明した。

現地の知識はどうにも正確性に欠く。それゆえに理解がとても難しい。

白いチョークにて文字を書くのだが、現地の言葉はキーノから教わった。

魔法には詳しいが現地の風俗には疎い。この辺りの差で自分は特別凄いわけではない、という事実が作れて——かえって——助かっている。

「妖術師は初期に『物質要素省略』という特技を取得することができる。これは細かい物質要素を節約できるので魔法詠唱者にとっては重宝するものだ」

ただし、制限がある。

一定の価値基準までしか適応されない。ゆえに蘇生魔法の様な大金を必要とするものには意味をなさない。しかし、低位の魔法を扱う分にはキーノにとっても有効に働く。

サトルは戦闘と生活に役立ちそうな低位の魔法をいくつか書き留める。その中でどれを取得するかは本人次第。

◇ ◆ ◇

目的^まを用意し、必要なアイテムを並べ、キーノは一つ一つ確認するように魔法を放つことに精神を集中させる。

紙に書いた程度で魔法は発動しない。それ以前に魔法を簡単に扱える筈が無いのだが——

下地が出来ているのか、現地の人間は割合簡単に習得してしまう。

（サラリーマンが魔法を使えないように人間が簡単に魔法を扱っていたら……。俺の世界は混沌と化すだろうな）

鳥の鳴き声を聞きつつ天気の良い世界でキーノの掛け声を聞きながら——
のんびりと生活する今の状況を楽しむかのように。

モンスターが蔓延るこの世界は平和そうでも血生臭い殺し合いがそこかしこで行われている。
おこな

今いる街もいつでも平和であるという保証は無い。

聞いた噂では世界を支配しようと企む『竜王』ドラゴンロードがおり、手下を増やしたり、新しい魔法を開発したりしているとか。

最強種のモンスターは——全てではないが——支配欲がある。特に竜種^{ドラゴン}は財宝に目が無い。

全てを手に入れようとしてもおかしくないほどに。

国を治める竜王^{ドラゴンロード}達は平和な世の中を本気で創ろうと考えているので今のところ人間の国に進出する事は無い。それは過去に手痛い攻撃を受けたせいだと言われている。

（……平和だな……）

長閑な日常に聞こえるのは女の子の声。

声の大きさより魔法を使いたいという意思を示す。それ以外に近道は無い。

経験値を消費してより上位の魔法を行使する、という手法も無くは無いが鍛錬で命を削ってはいけない。

「いくら不死者でも死なないわけではないのだから。」

「先人たちが扱う魔法は様々な説明……、効果などを教わっているから出来る、と言える。これに対し、自分で魔法を創作する場合はそれらの知識を積み重ねていかなければならない。一朝一夕にはいかないが、無理も良くない」

「はい」

汗をかかないとしても精神的な疲れは感じている筈だ。

キーノは努力家であり、素直で良い子だ。共に旅をしていても負の感情が見えない。

自分を不死者にした者の事を思い出したら、復讐にかられるのか。それとも——

サトルとて嫌な相手に嫌がらせや仕返しはする。だが、本当の殺し合いまでに発展することは今までなかった。——あつてはいけない世界だったけれど。

異世界に居る今はどうなのか。

あまり波風立っていたとは思っていないので自然に任せたいところだった。

「攻撃以外にも防衛魔法。探索系。強化関係と様々ある。キーノはどういう魔法を中心に覚えたい？ 何かに偏っている事も時には必要だ」

低位の魔法とありふれた攻撃魔法を中心に学んでいたが、キーノが本当に覚えたい魔

法も大事である。

今はどういう傾向が得意か分からないかもしれない。その辺りは柔軟に変化を付けばいいかとサトルは考えていた。

時間はたくさんある。場合によれば——物騒な手段も取れる。キーノの為ならば鬼にもなれる。ただ、彼女は不死者アンデッドなので効果がきちんと現れるのか、実験していないので迂闊には試さない。

「ちなみに俺の系統はオススメ出来ないぞ」

「……駄目、なの？」

上目づかいで弱々しく言うキーノ。男殺しの目だ、とサトルは戦慄する。

性欲が抑制されているとはいえ、ある程度の感覚は持っている。

大人しくて可愛い女の子なら尚更破壊力抜群の仕草だ。

それを抜きにしても彼女は確かに可愛い。人生に絶望したような狂氣的で凶暴な女の顔は見たことが無い。似たような顔は他では結構見てきたのだが。

（背も低いし、妹キャラなんだよな。というか俺の背も高いよな。……一旦生者になってもらって成長させ、それからまた死んでもらうのはアリかな？）

都合の良い即死魔法をいくつか習得しているので。

下らない考えだが、食らう相手にとってみればとんでもない事だ。

「……そろそろ一休みしたらどうだ？　いくら疲労無効と言ってもそれは肉体的な問題であつて精神は別だろうに」

「忘れないうちに出来るだけの事は学びたいから」

自分とは違いキーノは未来ある若者だ。様々な事を吸収できる。それに反してサトルは特別な条件が無ければ成長はしない。ほぼ頂点を極めた存在だ。

今以上の発展はこししばらく無かったが、変わりに成長してくれそんな弟子が出来たように退屈しなくて済んでいる。

彼女の存在はサトルにとつても心の癒しだ。

（そーいや、建物も魔法で創れるけど……。細かい部分まで把握しているわけじゃないんだよな。なんとというか自動的？　あれ、どうなつてんだろう）

楽しんで魔法が使えるサトル。現地民の大変さが理解出来ない。

もし、同じシステムが使えるならばもつとたくさんの魔法を扱えるかもしれない。

けれども、ここはゲームじゃないから何らかの不具合がいずれは起きるかもしれない。その危惧こそが世界を破滅へと導く存在ではないか。

恐れるものがあるからこそサトルは完全に怠惰な生活を送らなくて済んでいる。

もし——世の中に流されるような生き方をするようになれば——

元の世界の記憶もいずれば薄く、そして消えていく。

(……平和であれば嫌な記憶や大事な記憶も無くしていきそうだ。特に仲間達の思い出はもはや枷かせでしかない。……なんてことになるかもしれない)

仮定の話しではあるが——過去に囚われているばかりだと精神的に辛くなることもある。

帰ったところで幸せが待っているわけではないから。

特に自分の様な天涯孤独の人間は——

サトルの心に去来するのは虚しさだけだ。

(娘育成ゲームを好きなかだけできると思えば……。案外、ここも悪くは無い。気を付けていけば寿命を心配する必要も無いし。何よりここは……。おつと……。勉強を頑張っているキーノに何かしなければ)

ゲームの例えは言葉の綾だが、サトルの中では様々な決断が迫られていた。

悠久を生きる不死者アンデッドとして長い時を生きるのは本来なら辛い事だ。だが、その辛さは種族の恩恵で抑制できる。

精神的な負荷に対する完全耐性のように。だが、それは無理矢理生かし続ける拷問に匹敵する。

◇ ◆ ◇

仲間が居た時代が良かったと言えば確かにそうだと言いつける。しかし、そんな彼ら

にも生活がある。自分の都合を押し付けるわけにはいかない。

彼らは自分の思い通りになる人形ではないのだから。

だからこそ――

(この奇跡を共有したいなどと言うのは我がままだ。……運よく彼らも転移している事を願っているけれど……。あ、でも……。歴史から考えて同じ時間に来ていると思うのは早計か……)

その理由はゲームの仕様だった位階魔法が数百年前から存在している事だ。

何らかの事情で多くのプレイヤーが違った時代に転移して様々な事を伝えている、と言う仮説を立てると――

これから先にも誰かが転移してきて様々な冒険が始まる。その中には引退していない仲間、または自分の知りえない場所で遊んでいた仲間が居ないとも言切れない。

可能性としてはありえないかもしれない。彼らの多くはゲームから去ったのは事実だから。

(……いや、この考えはやめようと誓ったじゃないか。俺の手元には使い道不明の『ギルド武器』とユグドラシルのアイテムがいくつかと……。自身のステータスしか無い)

拠点を失った哀れなプレイヤーが一人だけだ。

そんなことを今更考えるのは――これらと決別しようと思っっているからか。

確かにいつかは過去と別れを告げなければならぬ。

（俺はこの世界でいつまでも冒険がしたい。けれども仲間達なら……、元の世界に戻りたいと願うだろう。彼らは糞みたいな世界でも故郷だと信じて疑わないのだから。……一応、俺もだけど。だけど、それでも俺は彼らほど愛着は無い。会社なんか行きたくない。働いても辛いだけだ）

なにせブラック企業の様な――

いや、そりよりは幾分かマシだとしても幸せは無い。あるわけがない。

「ここには運営から指図される事もサービスが終わる事も無い。……アップデートが無いのが痛いくらいだ」

声に出すと気分的にすっきりする。

あと、何らかの意見が通り世界が何かアップデートに似た現象でも起こしてくれるのでは、と少しは思っている。

「……えーと。この辺りがいいか」

雑木林の近くに移動したサトル。周りから見られる事を想定し、土壁をいくつか創造する。

アンデッド
不死者らしく骨でも壁は作れるが隙間が空いているのは困る。

（上からも覗けないように。後始末のし易さからこういう時は魔法って便利だなと思

う)

なにせ道具が殆ど必要ない。

通常であれば大工カペンターなどの専門家に依頼する。個人でも作れないことは無いけれど時間がかかるし、材料を調達するのも手間だ。

魔法によつて作った囲いはお世辞にも良い出来ではないけれど、簡易的なものとしては充分だと判断する。

高さ三メートル。横幅は一〇メートルほど。内部に柱を数本立てて天井を支えているだけの建物はサトルお手製の『風呂』である。

光源も魔法。残りは浴槽だが——簡易的に穴を掘る程度。

「仲間だったら……。もっと豪華絢爛に出来るんだけど」

(大理石建築の豪華な奴とか。そこまで派手だとかえつて目立つか……)

使うのは彼女だ。あまり目立たせてしまうと覗き対策に追われてしまう。

ずっと監視するのも精神的にキツイので地味目を心がけた。

幻影による偽装だとする前にキノノが見失ってしまう。後からかけるとしても外で待機するサトルが目立つ。じゃあ隠れればいいのか、という悪い事をしているような気分になる。

——という堂々巡りに思考が陥ってしまう。だから、隠蔽せずに普通に佇むことにし

た。

「……えっと次は……。あまり深くなく、けれども広めの浴槽つと……。
 〈クリエイト・ビット落とし穴創造〉……からの〈クリエイト・ファウン泉創造〉」

魔法の効果によって行使する順番を間違えると無駄打ちになる。

例えば先に魔法を反射する魔法を自分に使った後、強化パフの魔法をかけようとすれば反射してどこかに行ってしまう。あるいは自分のところに舞い戻ってくるかもしれないが、確実に一つは無駄になる。

重がけ出来ない魔法もその一つだ。

◇ ◆ ◇

サトルが使用した魔法は地面を掘るものではなく異次元の穴であった。効果が無くなれば消える。

泉も同様に。

壁に当たる部分は石材になっている。穴が消えるると中に居る者は自然と上に上がるので次元の狭間に引つかかったりはしない。

双方第二位階の魔法だ。それほど危険があるわけではない。

問題は落とし穴の魔法だから落下ダメージがあるかどうか、だ。あったとしても軽症の筈だし、痛みに耐性のある不死者アンデッドだ。

「キーノ。水風呂の用意が出来た。だいたい一時間くらいは持つと思うが入ってくれ。温かい方がいいなら温めるけど」

「ありがとう」

彼女が来る間、お風呂道具や着替えの用意を整える。

外での活動も幾分か慣れてきたとはいえ彼女は随分とサトルに心を許している。そのせいか、人の目につかない今の状況だと平然と裸になる。

この辺りの風俗では水浴びは普通の事だし、貧民街では恥ずかしいなどという羞恥は無いに等しい。

キーノも彼に会う前は一人で廃墟を徘徊していた。

（小さな女の子の裸くらいで騒ぐのは俺くらい、というのが納得できないが……。現地の人間にはありふれた光景だとか。実に羨ましい。……。しかし、人に見られて困るほどの美貌を持っているわけではない、という意味だとすれば納得できてしまうから困る）

最初は確かに慌てたが今は多少、顔を逸らす程度で済んでいる。

元々、羞恥の精神は抑制されるのでガン見しても平気なのだが――

それでも色白で美しい少女の素肌は直視するのに躊躇いを覚える。

（自分の妹や娘だと思えば……。周りからは父親とか思われてもおかしくはないよな。偽装に黒髪の男性を使っているからキーノより俺の方が目立っているみたいだけど）

本当なら親子らしく一緒に入れればいいのだが、白骨の死体と戯れる美少女という絵面を想像して遠慮しがちになっている。

身体にタオルを巻いてくれれば頭くらいは洗える。

(いつも一人で入浴させているから寂しいのかな、と思ったりしたけど)

ザブーンという景気の良い音が聞こえた。

水はしばらく噴出し続けるので飛び込み程度は問題ない。溢れようが構わない。それと心臓麻痺についても心配は無い。

元より心臓は止まっているし、呼吸も必要としない。凍死すら起きないので脳機能の低下も低体温症も。窒息に溺死も。あと、低地だから関係ないけれど高山病も酸素欠乏症も。

風呂の水が聖水や溶岩でもない限りは何も――

さすがに下水での水浴びはサトルの良心に大打撃だ。これは『邪水』というものだと自分達側にとつては意外と有益に働く恐れがあるから。絵面的には酷いのだが。

血液を浴びてパワーアップするキーノより清潔感のある少女がサトルには好ましい。

(今度、お金を稼いだら浴槽に浮かべる小物でも買おうかな)

水と戯れる少女を影から守りながらサトルはぼんやりと思った。

これが幸せな生活という奴なのかな、と。

† 0 0 2 〈幕間〉 キーノがんばる！

平和な日常は永遠に続くわけではない。それを思い知る日が来た。

腰にかかるほどの金色の髪に赤い瞳を持つ『キーノ・フアスリス・インベルン』という少女は身の丈に合わない強敵と遭遇し、苦戦の末に逃げ帰る結果となった。

この世は様々なモンスターが蔓延っている。強さはまちまちで見た目では分からない。
い。

その中で真の強敵は早々相手に悟らせないものだ。共に旅をしているサトルという男性の不死者アンデッドのように。

「はあ、はあ……。クソ、しくじった……」

低位の魔法の修行中に遭遇したモンスターが思いのほか強かった。

見た目は同じでも強さが段違いに違う亜種が存在するが、今回の相手は自分と同じく何らかの強化種であった。

自然界のモンスターは知性の乏しい野生種以外にも長生きをして様々な知識を得る者が居る。

ドラゴン
竜も知性体としては有名なのだが――

「……………あの花弁人……………、第三位階の使い手だとは……………」

森の奥で遭遇した植物モンスターで、足元を地面に埋めて佇んでいる。

見る分には大人しそうな雰囲気をもとっている。けれども見た目とは裏腹に強い部類のモンスターである。

一見すると動きそうにないのだが、普通に地面から足を引き抜き走ってくる。尚且つ魔法を習得している者も居る。

冒険者の噂としては聞いていないが雑魚モンスターだと思つて侮つてしまった。

(サトルから無暗に知らないモンスターと戦つてはいけないつて言われていたっけ)

それはそうなのだが、戦わないと強さが分からない。

確か何らかの方法で相手の強さを測るらしいが、それを聞いていなかった。

花弁人アルラウネというモンスターは人型の女性体で頭に大きな花を咲かせていたり、腰回りが花びらになつていたりする。

花にたくさん種類があるように花弁人アルラウネも多種多様な姿をしていた。その中で近親種と呼ばれる者の違いは『身体の色』である。

通常の花弁人アルラウネは緑系で、赤系は赤き花弁人アルルーナだ。

今のところはこの二種が確認されている。



吸血鬼は種族の恩恵として『高速治癒』を持っている。どんなに大怪我をしても——逃走に成功したのであれば滅びる可能性がなくなるので——大抵のケガは自然と治る。種族としても強い部類に入る。しかし、キーノはまだ幼く、強さも噂には届かない。攻撃魔法によって片方の目が潰され、右腕は中ほどを吹き飛ばされ、左足は治りかけているが骨ごと削り取られた。

何とか這いずるように帰還の途につくのがやつとの状態だ。

(……腕は諦めたけど、治るのかな……。痛みは感じないけれど物凄く気持ち悪い) 痛みが無くとも不快感は消せない。

必要以上にダメージを受けると吸血鬼とはいえ滅びる危険性がある。

止まっているからといって心臓と頭部の損壊だけは避けるようにとサトルから厳命されていた。だから逃走を選んだ。

憎いからといって深追いは禁物。確かにその通りだ、と。

(か、身体が重い……。もしかして私、ヤバイ?)

手負いのクリーチャーたる吸血鬼が人間に見つかれば狩られてしまうおそれがある。

今は北方にある『アーグランド評議国』で冒険者登録を済ませた身分ではあるけれど、それ以外の国にとってはあまり関係がない。

異形種は潜在的に人間種の敵だからだ。

もちろん、全員がそうではない。しかし、モンスターの肉体は何かと都合が良いらしく、内臓とかよく分らないけれど取引材料の為に異形種を討伐しようとする輩が居ないとも限らない。

キーノが思い浮かべられることは少ないが、魔術的に吸血鬼の肝だの眼球が高値で取引される、とか。

(……滅びなければ眼球とかどうなるんだろう？ 取ってもまた生えてくるような平気とか？ ……嫌だな、拷問みたいに取られるの)

口を尖らせつつサトルが待つ拠点に向かう。

近隣の都市は様々な種族が行き交い——人間種も居る——毎日が喧噪の有様となっている。

喧嘩は良く起きるけれど、屈強な亜人種や異形種が多いので都市の危機には至らない。

名物が何かは知らない。様々な情報をやり取りするのに便利だとは聞いている。そして、たくさんの方が居る。そこに手負いのキーノが現れれば騒然とならざるを得ない。

なので普段は隠れ家のような拠点を用意し、そこから都市に向かうことになってい

る。

何かあった場合の避難場所として。

(あつ、あー。腕が途中で回復をやめちゃった……。脚はもうすぐ治りそうだけど……。完全にサトルに怒られる)

優しい彼も怒る時は怖い。本当に不死者か、と疑いたくなるくらい感情を露にする時がある。

多くはキーノがケガとかする些細な場合が多い。不死者だから平気と思っているのは自分だけ。

彼は他人の——特に仲間の——危機に本気で心配してくる。

当初こそ色々で大慌てだった彼もここしばらくは大人しくしているのだが、それでもキーノがケガをすると本当に悲しそうな雰囲気をもとう。

そんなにケガをする私が嫌なのか、モンスターは平然と駆逐するクセに、と何度も思っただものだ。

◇ ◆ ◇

吸血鬼として体内には血液という体液が満たされている。

ケガをしたキーノは血だらけだったが拠点にたどり着く頃には殆どが蒸発している。地面に落ちた分も今頃は消えている筈だ。

失った血液もまた時間経過で元に戻る。戻ると言うか再生するように身体の中に満たされていく。

肉体を持つ不死者である吸血鬼が長い時をそのままで生きられるのはそういう原理が働いているからだ。もし、それが働かない場合はサトルのような白骨化した不死者アンデッドになる筈だ。

——確認したことが無いので詳細までは知りえないけれど。

(……あー。サトル、すごく怒るだろうな。まっ、人間の冒険者に見つからなかったのは運が良かった)

もし、そうであつたらサトルなら復讐しに向かうかもしれない。

敵対者には容赦しない性格のようで、いくつかのチームが人知れずこの世から消滅したのをキーノは知っている。

彼は真つ当な善人ではない。時には人をも殺す。キーノは力不足で殺人自体は未経験だ。——たぶん。

記憶が曖昧な時期があり、その最中に誰かを殺している場合もあるが、身に覚えが無い以上はどうしようもない。

今回、一人でモンスターと戦うことになったのは自身の増強が目的だった。それに早速失敗したわけだが——

全てのモンスターの情報を把握しているわけではない。けれども未発見の場合、逃走に失敗した時の事を考え、ある程度の戦闘はやむなしと聞いている。それでこの様さまである。

(大人しい植物モンスターだと思ってたのに……。魔法を遠慮なく撃つてきやがつて……)

位階が高いことは勿論、それらを回避できないのにも驚いた。

一部の魔法に追尾機能がある事は聞いていたが、実際に食らうことになるとは、と。

サトルは優しい。だから、キーノがケガをしないような戦法ばかり取る。そう思えばこの度の失態は彼にも責任があるような気がしてきた。

実際の戦闘は苛烈であり、命の危険が付きまとう。

そうなると彼の厳しい一面を見る事になるので心が痛む。そこはきつと自分の甘えだ。

「……お帰りなさいませ」

「!？」

足元の影から言葉を駆けられて驚くキーノ。

どうやらサトルの索敵範囲内に入ったようだ。

通常は護衛が付き、滅多なことでは異分子たる強盗とか野盗に襲われる心配は無い。

しかし、今回は一人で頑張るからと言い張り、護衛を拒否した。その結果は以下同文だ。「だつ……。た、ただい、ま……」

「お怪我をされているのですか？」

念のために周りを見たが不審人物は見当たらない。頭では分かっているにもかかわらず突然の声掛けはまだ驚てしまう。口から出かかった言葉を懸命に飲み込み、返答する。

大怪我については——見ればわかる結果だ。今更隠し果せる訳も無し。

しかし、治癒と言っても通常の治癒魔法やアイテムでは不死者を癒すことは出来な
い。自然治癒にも失敗している有様だ。

これをサトルならばどう治すのか。彼ならば様々な手法の知恵を持っている筈だと
（頭と心臓は守った。だけど……腕はどうなるの？ 痛みが無いのが逆に気持ち悪い）

雑念に囚われたキーノはトボトボと歩きつつ隠れ家にたどり着く。

隠れ家と言っても魔法による隠蔽は施されていない。農村の片隅に置いてある小屋
程度の代物だ。これを魔法的に隠蔽する方が目立つと言っていた。

外見こそ貧相でこじんまりとしているが中は想像以上にしっかりと作りになっ
ていて、家具も揃っている。メイドと執事も居たのだが邪魔だからと退去させている。

この小屋は第四位階『安全宿泊所』^{セキユア・シエルダー}で作り上げた。ちなみに、第二位階にも似た魔法

があるのだが、こちらは人——女の子が使うには——の住むところとしては抵抗がある代物だ。

◇ ◆ ◇

小屋の扉の前で硬直するキーノ。ノックしたくない、という気持ちに苛さいなまされる。しかも利き腕が無いので態勢を維持するのが意外と難しい。

何度も深呼吸吸って挨拶の言葉を考える。

普段通りの事が今は出来ない。難しい。

難度が上がったモンスターのように。

(駄目だ駄目だ。こんなケガはこれからも負う。それでいちいち元気をなくしていたら生きていけないし、生活もままならない)

なにより冒険者だ。強大なモンスターと戦う機会はこれからも出てくる。

単なる農民に成り下がることも出来るけれど、それは旅の目的ではない。

サトルが旅を諦めて農家をやりたいと言えど——それに従うけれど。今は、と付くが。

そんなことより、まず自身の強化が最優先課題だった。それ以外は白紙。

(異形種なのに勇気が出ないなんて……。それは能力に関係ないのかな?)

とにかく、黙っていても隠し通せるものではない。

必要な道具が中にある事だし、と。

だが、それでも気が重い。誰かに迷惑をかけたくないなどと思える自分に驚きつつ。意を決し、左手で扉を叩く。

「た、ただいまー」

少しどもりつつもいつもの調子で扉を開ける。

鍵はシモベによって既に開けられていた。そういう役割を命令されている。

室内に入って扉が閉まると自然と鍵がかかる音が背後から聞こえる。

(……居るかなサトル)

出かける時は黙って出て行かないので連絡が無い場合はだいたい留守番している。

黙っているわけではなく、人材確保のための計画書を作成しているのだとか。

「お帰り、キーノ」

部屋の奥から聞きなれた男性の声が聞こえた。だが、今日のサトルの声は一段と怖く感じた。まるで悪戯を咎められる子供のようにキーノは怯える。

今回の戦いは無断で行ったわけではない。出会った相手が悪かっただけだ。

森の探索は前々から決めていたし、一人である程度戦わないと強くなれない事もサトルは納得してくれた。

(……それに)

過保護のサトルの事だから状況は既にシモベから聞いている筈だ。知らないわけがない。

情報を制する者はあらゆる事態に即応出来るものだ、と御大層な事を言っていた。

そして、部屋の奥から姿を見せるのは豪華な漆黒のローブを身にまとう不死者モンスター。彼こそが強大な魔法詠唱者『サトル・スルシャーナ』だ。

白磁の如き白骨の姿を晒し、落ち着いた様子でキーノを出迎える。しかし、既に彼は彼女の異変に気付いている筈だ。

◇ ◆ ◇

気を使うことはあっても逆の立場は意外と気恥ずかしい。そうキーノは思いモジモジし始める。

これが不死者アンデッドでなければ痛みに呻き、みつともなく泣いて助けを請う場面だ。決してこやかに笑ったりなど出来ない。

しかし、何故だかキーノはこの時、とても恥ずかしかった。

恥じらいなど種族の恩恵によって無効化されてもおかしくないのに。

心臓だつて止まっている。脂汗などかかない。それなのに胸の奥が熱くなる。

全ての不死者アンデッドが一律に同様の精神耐性無効を持つていないわけではないのかもしれない。それともキーノやサトルだけ特別なのか――

「派手にやられたそうだな」

(来た!?)

一番聞かれたくない言葉。それだけで恥じらいから殺気へと緊張が変化する。

普段は温厚で優しいサトルも彼女の異常に対して怒りを感じている。それは彼女に向けられたものか、それともケガをさせた相手か。

とにかく、冷たい刃がいくつかサトルから生まれているのは理解した。

「……油断した。そう、油断したんだ……」

「そうか」

慎重に慎重を重ねた戦法はキーノにとってまだ苦手で、頭を使った戦法をしろと言われても出来る手段が限られている。

なにより高い位階魔法を習得していない。手持ちの魔法は一〇も持っていない。

言い訳を考えているとサトルは椅子に座り、テーブルにあるものを置いた。

(……あつ)

それは黒い袖が巻かれた人間の腕。というかキーノの奪われた筈の右腕だった。

出血自体は既に止まっており、どうしてか滅びずに済んでいる。

確かに切り離された部位というものがすぐに滅びるとは聞いていないし、今まで確認したことが無かった。

ただ、知識として聞いていたので、そういうものかなと。

「吸血鬼はとてもしぶとい生き物だ。己の核さえ無事であればこういうものはしばらく残る。……さて、これは誰の腕かな？」

「……かく？ あ、えと……。……私の……です。はい、ごめんなさい」

知識では未だにサトルに及ばず。というよりも彼に勝てる気がしない。

頭を下げて謝ると不穏な気配は温か味へと変わった。

部屋の中の温度が零下から温暖へと変わったように。それだけ劇的な変化をサトルは気配だけで起こせるのだ。いや、そう感じているのはキーノだけかもしれないが。

「知っているか、キーノ。吸血鬼の中には血液だけになっても動いたり操作する能力を持つている者が居るといふ。信仰系の攻撃でも受けない限り……。消滅に似た魔法攻撃などを受けない限り絶望するのは早いぞ」

そう言いながら自分の対面に座るように合図するサトル。それに拒否できるほどキーノは我がままな娘ではない。

トボトボと叱られた子供の様に素直さを見せる。

◇ ◆ ◇

サトルは魔力系を殆ど極めている。元来、治癒は信仰系に属する魔法だ。それは聖属性とは真逆の効果を持つ魔法であっても。

大抵の職業には善と悪、クラス、グッド、イビル、ホーリー、アンホーリー、パラディンの逆は反聖騎士といった具合に。

アンデッド 不死者を癒す魔法もまた存在する。

(……キーンも大怪我をするようになったか)

最初こそはサトルとて慌てた。すぐさまシモベを現場に向かわせて対象の排除に努めようと思った。けれどもすぐに思い留まる。

これはキーンとの戦いなのだ、と。

彼女には窺い知れないが最初の探索は監視付きである。この辺りには物騒なモンスターがたくさん生息しているので。それと色々と不穏な連中の影も確認していた。

全員がキーンを狙っているわけではないが、可愛い娘を襲うような奴らは基本的に排除することになっていた。これはあくまで保護者的な観点だ。

(俺も大概モンスターを殺してきたけど……。こうして腕だけになったものを見ても平気でいられるのは……。この身体のお陰なんだよな。普通なら目を背けるとこなのに)

ゲームでは散々モンスターを殺してきた。それは彼らがゲームの中に出てくるキャラクターだから。現実ではないから。そんな理由がある。しかし、この世界は違う。

殺せば血が出るし、内臓もしっかり備わっている。アンデッド 不死者はきちんと滅びたりする。

ゲーム的な要素がありながらいやにリアルな描写――

長く放浪してきてゲームの延長だなどと思うことをやめたわけだが、今でも信じられない。

（血と肉を持つモンスターが文化を持つて生活していることに。自動的に何処からともなく湧いて出て来るわけではない。それを知ったのは……随分と後になってからか）

と、いつても数年程度だ。

半年ほどの経過で思い知る。ここは現実世界であると。

いくらサトルでも長期間の滞在は不可能である。何がと言われればゲームの中に、だ。

現実世界の時間が別にあり、会社に行かなくてはならない。そう思って今に至るわけだが——

経過時間から見て——もし、現実世界に自分の肉体があると仮定して——元の世界に戻った瞬間に自分はきつと死ぬ。餓死なのか病死なのかは分からないけれど。確実な死は待っている筈だ。

（それならここで暮らすことを選んだ方が有意義だ。得策ともいうが。それにせつかく能力を使えるのだし、側に可愛い女の子も居る。これと言って目的のない旅もいいかもしれない。……まあ、天涯孤独の俺にとっては楽しいと思えた方が大事だ）

そんな事を夢想している合間、キーノはただじつと何かに耐えるように佇んでいた。

目の前には微妙に動いている右腕が食器皿の上に載っている。これはテーブルが汚れるのを防ぐ目的であつて、食べると命令する為ではない。

「キーノ」

「は、はい」

怒られると思つて背筋をまつすぐに伸ばす。

その様子に子供を叱りつける親のイメージがサトルの中に浮かんだ。ただし、それは他人の親だ。

静かな雰囲気に出すと大体は怒られると思うか、とため息をつく。

「完全勝利しか許さないとはいわない。敗北もまた経験の糧だ。……腕の接合については今考えているところだが……。今回戦つた相手は……。強かつたのか？」

「……うん。気弱そうなモンスターだとばかり思つてたから」

見た目だけでモンスターの強さが図れるほど甘くない事はサトルも承知している。しかし、詳細な強さを把握するには——実際問題として一度戦う方がいい。

仲間の一人も一回殴つてから対策を考える、と言つていたくらいだ。

思い悩むより行動してみる事も大事だと思う。しかし、いきなりにしては酷い結果だ、と。

(腕がもげてるし。ここまで酷いとは俺も思わなかつたよ)

瀕死の重傷の時は手を出す予定だった。何事にも慎重を期するサトルにとっては精神的に大きなダメージを受けたのは間違いない。

遠くに居る相手の様子を見る魔法を取得している彼にとって探索ごとはわりと得意分野である。

「次は勝てそうか？」

「……分からない。今のままでは勝てないと、思う……」

無理して強いモンスターを打倒する必要は無い。適度な強さのモンスターをとにかくたくさん倒す方が効率が良い。ただ、現地の住人達はその事を知らない。

そういうゲーム的なシステムを理解していないというのが正確か。

（治療担当はどうしようか。悪属性の聖職者クレリックでいいんだよな？ 召喚モンスターはいまいち不安だ）

不満なのは使用できる能力が少ない為だ。

かつての仲間達が作り上げた者達ならば——もっと多彩な能力を發揮してくれらというのと。

居ない者の事を思っても仕方がない。今あるもので苦境を打開するしかないのだから。



キーノに説教する場合は一人で勝手にした時だ。今回は事前に色々準備をした上で、の敗北である。

想定外のモンスターを除けば結構健闘した方だ。サトルとしても敵モンスターが予想外に強かった事に驚いたほど。

それに無理を通さず撤退を選んだ。

（強くなる方法が俺達とはまるで違う。情報収集も思うようにできない世界だ。それで生きて帰る事がどれほど大変な事か）

生き残ることこそ最も大事な戦略である。逆の立場なら絶対に敵は逃がさない。モンスターにも生きる権利があるなら次に襲われる覚悟もきつと持っている。

そうなれば同じモンスターでも取れる戦略が変わるのは必然だ。

（自身の強さに決して驕^{おご}ってはならない。この世界ではそれが顕著なんだろうな）

キーノに身体を清めるように言いつける。

アンデッド 不死者なので聖水をかけると肌が荒れる。すぐに治るけれど。

ここで言う『清め』とは風呂で水洗いすることだ。汚くても問題無いとしてもサトルからすれば気になる事だった。

しかし、これはあくまで個人的なものだ。

（……しかし、不思議だな。アンデッド 不死者の身体というものは。死んでいられるけれど生きている。

そういう不可思議な概念が存在する世界というものも……)

ゲームとは違い、現地産の不死者だ。実物と言ってもいい。

情報自体はゲームとほぼ一緒。当たり前のように当たり前ではない。

オリジナルの神話体系ともいうか。

「……そして、それを平気で扱える俺……。普通に死体とか見たら驚いたり忌避するだろうに。どうしてか平気なんだよな」

キーノが居ないせいとか、ついつい独り言が出る。

いつものクセというか、単独の慣習みたいなものだ。

声を出していないと喋る事が出来なくなる気がする。魔法を唱える上でも発声は大
事だ、という意識が働いているためだと思われる。

大事な事ならやらなければならぬ。いざという時、何もできないのは困る。

「この腕に特殊技術を使って死の騎士を創ったら……。キーノは物凄く泣くだろうな」

その辺りは慎重に扱わないと本当に危険なので。

死肉ではあるが作れないことは無い。それがまた厄介な問題だが。

キーノの腕ではあるが死の騎士。命令はサトルからしか受け付けられない。

もはやそれは別物だ。



ごくたまに自分の能力がおかしな事態を招くことがある。だから、行動には細心の注意を払う。

それが他人から見れば慎重派のように映るわけだが——
風呂から戻ってきたキーノは上半身裸。

外見年齢十代の彼女にとって気にするほどのことは無いのかもしれないが、サトルはわりと気にしてしまう。

もう少し年齢が高くて胸が大きければ、と思うも風習などによつて気にしない事もあるのかな、と。

それにモンスターは基本的に裸だ。彼が羞恥を覚えないのと一緒だと思えばおかしなことはない。

これは眼福だと思つて黙っている事にする。折角見る事が出来るのだから勿体ない。それに過度の興奮は抑制される。これがまた不死者アンデッドになつて良かったと思える機能であつた。

対するサトル側は裸どころではなく中身そのものであることは柵むじに上げている。
寧ろむじ気持ち悪い内臓系が無い骸骨スケルトンで本当に良かった。